

まえがき

ピアノ教室の先生方こんにちは、そしてこれからピアノ教室を開いて沢山の方々にピアノの楽しさを教えていきたいと考えておられる皆さん、ようこそ！ 私は、およそ半世紀の間、大阪でピアノ教室を開いている松井音楽教室の松井登思子です。皆さんが進路を音楽に決められたときに、「私はピアノ教室を開いてピアノを教える！」と決意されていた方は少ないと思います。私がピアノ教室を開いたきっかけは、音楽学科の大学生の頃、出身高校の先生から音楽科を受験する方の受験指導を依頼されたことでした。大学時代は主に大学の音楽科を受験する方対象のレッスンをしていました。楽典・聴音・ソルフエージュも含めての指導を通じて、ピアノを弾く技術以外の知識を教える大切さを強く感じていました。大学卒業頃から、年少の生徒の指導をするようになりましたが、始めからレッスンに初歩レベルのソルフエージュ・聴音・ワーク、市販されていない手書きをして取り入れました。ご近所のお子さんと、そこからの口コミで、すぐに生徒数は30人を超し、現在は、大体週70人の個人レッスンをしています。人数が増えてからは、3人の子育てもあり、入会希望があっても待っていたいたり、以前私が指導した受験生に代わりのレッスンをお願いしたりという時期もありました。また、ピアノは私が指導し、スタッフにそれ以外の補足部分を担当してもらおう分担制を導入した時期もありました。この時期はスタッフ6人に対し、毎週、ど

のようなことをどういう形で指導していただくかを伝え、生徒のスケジュール変更にも対応できるように、私とスタッフ間の連絡ノートを作りました。スタッフと私は同じ部屋で生徒の指導に当たりますので、都度の連絡を密にしました。この頃は約120人の生徒の指導をしていました。

提案

これから教室を開きたいと思われる方は、何人かの先生でグループを組まれてピアノ教室の運営をされるのもよろしいかと思えます。ピアノが必要ですから、各先生のレッスンを同じ場所で行うなら、代表の先生の家で行い、ほかの方は代表の方に家賃を払う。レッスンを各自で行うなら、グループで研修会を持ち、教材や指導法、レッスンでの気づきを出し合い、各々のプラスとする。または、ピアノ指導とその他の身に着けてほしいことの指導をする先生に分けて、2人の先生で指導するシステムを導入する。他の方のレッスンを客観的に見るのは、自分自身の気づきにもなります。A先生がピアノを指導するとき、B先生が補助に入る。B先生がピアノを指導するとき、C先生が補助に入る。C先生がピアノを指導するとき、A先生が補助に入る。「3人寄れば文殊の知恵」ではないですが、1人で悶々とするより知恵を出し合える仲間を作るのもいいのではと考えます。

大学では教員試験の為の授業はあっても個人レッスンをするための授業はなかったと思いますから、参考にできる

のは、ご自分が受けられた個人レッスンの経験くらいしかないでしょう。しかしそれでは十分とは言えません。これからその理由を説明します。

皆さんの中には、1人の方にと師事されてきた方も、何人もの先生に師事されてきた方もおられると思います。それぞれの先生方の指導方針は異なっただと思いますが、確実に言えるのは、皆さんは全員、音楽を専門にしたいという希望を持たれて熱心にレッスンを受けてこられたということです。音楽大学に進まれた方々はピアノのレッスンを受けるために練習に励まれ、曲に対して色々試行錯誤される日々を過ごしてこられたと思います。つまり、皆さんは極めてモチベーションの高い「ピアノを弾けるようになりたい熱心な生徒」だったのです。

次に、経済的な状況も変化しています。わが家がアップライトピアノを購入した1955年当時は、アップライトピアノは大卒の初任給10か月分、と言われる程に高価なものでした。ちょっと習ってみようか、ではなく「ピアノのお稽古を受ける」時代でした。今は、キーボード、電子ピアノなどであれば、機種によっては安く購入できますから、「音符が読めてピアノが弾けたら」くらいの気持ちでピアノレッスンを始めさせるご家庭も増えています。情操教育に関心を持たれているご家庭も多いです。さらに、習い事自体多様化しています。例えば、私の教室に通われている生徒たちに入会時に提出してもらう「生徒カード」に書かれる習い事の欄には「体操・水泳・サッカー・ダ

ンス・新体操・バレエ・少林寺拳法・野球・剣道・合気道・バレエボール・スケート・空手・ジャズダンス・ボルダリング・習字・碁・将棋・公文・ソロバン・学研・英語・七田・絵画・塾」と多岐に渡り、加えて一日に2つも3つも掛け持ちをしている子供もいます。中学校になると検定や資格試験を受ける機会を与えるところも多く、そのため、自主的にしたいこと、じっくり取り組みたいことがあるとき、「意識して作らなければ時間は無い」ようになっています。習い事は大きく分けて「教室に行つてそこで習うもの」と「教室に行つて習ったことを家で履修するもの」の2つに分かれると思います。ピアノのお稽古は、後者です。レッスンを受け、次のレッスンまでに、自分でピアノに向かい、練習をすることを大切とする習い事です。オンオフの切り替えができる人、しなければいけないことが頭で分かっているもあたふたとしなければ行動に移れない人、後回しにしてだらだらしてしまう人。そんな色々な方が、ピアノを習つてみたい、と教室に来られる訳です。ですから、語弊があるかもしれませんが、昔は、ピアノを指導する立場の先生のところ、ピアノを弾けるようになりたい熱心な生徒が習いに来ていたのが、今は、先生の方が、自分の元に来た生徒が弾けるようになるまで、レッスンを続けるモチベーションを保てるように考えなければならぬ時代になっています。

ピアノのレッスンでは、レッスンを通じて生徒の持っている能力を引き出す手伝いも出来ます。子供は色々な能力

を持っていきます。能力の扉は 開けるのが簡単な場合、難しい場合、開け方の解らない場合、扉のある事すら気付いていない場合があります。指導する側はその全てに心を配る必要があります。

指導する側が気を付けなければならないこと。それは「認めること」と「決め付けないこと」だと思います。出来ることを認めることは生徒を伸ばす事につながると思います。しかし「この生徒は出来る生徒だ」「この位はこなせるはずだ」と思い込むと、生徒に負担をかけたたり表面的に仕上がっていても中身の薄い内容になったりします。

反対に、「この生徒は練習をしない」とか「理解するのに時間のかかる生徒だ」と決め付けると、生徒の伸びる時期を見過ごしてしまいます。どんなに幼い生徒でも自分の好きな曲に出会うと驚くほど練習をしてきますし、「私、この音好き」と重音や和音を弾いてくれることがあります。どんなに落ち着きのない生徒でも、ずっと成長をしないということはありません。じっくり取り組めることに出会えれば、集中して物事に当たれるようになります。そして、そういう生徒にとって素晴らしい曲との出会いこそ、成長のきっかけになると考えます。指導する側は生徒の特性を見極める必要がありますが、それと同時に、常に新鮮な目で見ることでも大切だと思います。

ピアノを演奏するということは、自分自身の眼で楽譜を見て、指で鍵盤に触れ、フレーズを考え、足でどの種類のペダルの踏み方をするかを考え、時代や作曲家、曲想を思考し、体の脱力を意識し、鍵盤に指先が触れる瞬間に、指

を下す速度、指にかける重さ、着地の保ち方までを自分自身の思い描く通りにするということは、3〜5年習ったからと言って習得できるものではありません。それくらいでは、出来ているか出来ないかの自覚すら持てないと思います。まず自分自身が演奏する曲を素敵だと感じ、家族や親しい人も「素敵な音楽ね」と感じ、見知らぬ人も「お上手ですね、何という曲ですか」と興味を持つくらいに弾けるようになってほしい。それくらいになれば、ピアノ教室を離れても、私の手を離れても、ピアノを楽しめる力が身についていると思います。通っていた生徒が、習っていて良かった、と思える教室を目指す努力を、今の時代はしなければならぬと思います。この本が、あなたのピアノ教室がより良いものになる手助けになれば、これ以上の喜びはありません。

見学

ここからは主に私のやり方を紹介します。もちろん、他にもやり方は色々あるのでしょうか、ご自分の考えに合うように取り入れたり、参考にしていただければと思います。

私の教室では、それぞれの生徒に合わせた本を使って指導しているので、体験レッスンは行っていません。そのかわり、入会希望の方には、既に私の教室に通っている生徒のレッスンを見学していただいています。入会希望の方

から問い合わせの電話をいただいた時、「レッスンを見学していただいてから決めていただきたい。」ということをお伝えします。そして、お子さん若しくはご本人が、何歳位の生徒の見学を希望されるかということと、都合のいい日時をお聞きし、見学日時を決めます。このとき、約束した時間のご都合が悪くなられたら連絡いただきたいということをお伝えします。また、こちら側からも、見学を希望された時間の生徒が病欠の場合もあるので、その際の連絡のために、お名前と電話番号をお聞きします。また、私の教室ではそれぞれの生徒に合わせた本を使って指導しているので、体験レッスンは行なわないことも伝えます。さらに、入会が決まりましたら、面談を行い、使用する本などを決めさせていただくことも伝えます。

レッスン形態

次に、私の教室で行っているレッスン形態をお話しします。

私は個人レッスンを行っていますが、レッスン室に1人しか入れない交代制ではなく、常時2〜3人は生徒がいる状態を作っています。それは、兄弟姉妹がレッスンを習いに来た場合、往々にして下の子のほうがレッスンがスムーズに進むという経験に基づいています。上の子は全くすべてが初めてで、ピアノの前に座ってピアノに指を下す

光景も、ピアノから出る音、自分が弾くことで耳に入ってくる音楽も未知の世界です。一方、下の子は単にその場に
にいるだけで耳に音楽が入ってきます。ピアノに向かう上の子の姿も見ています。だから、全く初めての体験では
ないのです。それゆえレッスンにもスムーズに入っていけます。これを活用します。レッスン時間は、大体、年少の
生徒が早い時間帯で、時間が遅くなるにつれ年齢が上がっていきます。生徒がピアノレッスンを済ませワークをし
ていると、自然と次にピアノレッスンを受けている生徒の音楽が耳に入ってきます。いずれ自分も習う曲かもしれ
ません。何よりもピアノの音色が耳に入ってきます。ただし、この時の注意点は、「静かにしましょう」です。これ
は年齢に関係なく、付いて来られている大人の方にも徹底します。だから、どんな方が教室に入ってこられるかは
重要になります。入会を希望された場合、まず見学をしていただきます。教室の雰囲気をご本人に合うかを体験し
ていただくためです。こちらも、どんな方か見させていただけます。以前は、見学の時に来られるのは、本人とお母
さんのお二人か、もしくははその時預けられなかった下のお子さんを連れて来られるくらいでした。近年はご家族そ
ろって来られることが増えました。それだけ、習い事や教育に関心を持たれる方が増えたのだと思います。兄弟や
おじいさんおばあさんも来られることが多くなりましたが、なかには、ピアノ教室がどういうものか、どういう風
に過ごす場所なのかを全く分からずに来られる方もおられます。見学は生徒のレッスン枠にお邪魔するというもの

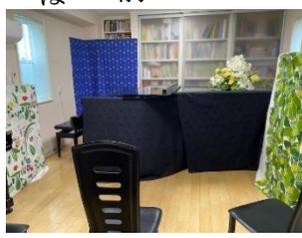
ですから、見学者がレッスンの妨げになる態度や行動をされた場合、大人子供関係なく生徒同様に注意させていただきます。見学後入会を希望されると、レッスン希望の曜日時間をお聞きし、面談を行います。

(写真1)

写真1 家族コンサートを行う時の教室内

提案 私のやり方は、音読み、リズム、脱力、初見等、ピアノのレッスン以外のことをする上で、

一部屋の中に生徒が複数いる状態を作るといえるものです。初めは慣れないと思いますが、前述したように、ほかの先生と組んでレッスンを行うことで対応することも、選択肢としてはありだと思えます。



面談時に行うこと

面談で、どのような本を使っていくかなど、その生徒の指導方針を決めます。その生徒が理解しやすく、極力受け入れやすい本を選ぶために、本人とお話をし、どの程度のことか出来るのかを見させていただきます。なお、生徒が小さい子供の場合、保護者とお話をします。大きめの用紙を机に広げて生徒に線を1本書いてもらいます。筆記具として、鉛筆2B、色鉛筆、クレパス、マジックを用意しておき、生徒に選んでもらいます。縦の線が1本書いたら

その横にもう1本。これで、書きなれているか、筆圧はどのくらいかが分かります。次に、線と線の間にも○の一部がくつつくように○を書いてもらいます。理解できない場合はお手本を書いて見せます。この時、どの程度の話し方で相手が理解できるかを見ます。さらに、○を2〜3書いてもらいますが、その○が大きい場合、線から出ないように「もう少し小さな○も書けるかな」などの声掛けをします。次に、○に色を塗ってもらいますが、これで、お絵かきを普段しているか、していないかがよく分かります。真ん中だけとりあえず色を塗る、端からきっちり塗っていく、○の存在はないかのように塗る、同じ色しか使わない、毎回色を変える、筆記具も変える、腕を大きく動かして塗る、手首から先だけをくるくるさせて塗る、と色々です。その状況も、その子どもを理解する手立てに使います。その際、ついて来られている大人の接し方も見させていただきます。全くタッチされない方、都度、先に方向性を示される方、ご自分の考えと違うと黙って消してしまわれる方と、これまた色々です。

お子さんへの接し方を見させていただくことで、家でのお子さんが練習するときの関わり方が想像できます。

・練習の際積極的に横につく方

・練習する時間を約束して守らせる方

・気が付いた時に「練習しなさい」と声がけする方

・「ピアノどんな曲を習っているの？聴かせて」と声掛けする方

・「何故練習しないの！」と叱る方

お子さんがピアノを始めたのと同じように、始める機会を与えたお母さん自身も未経験者です。どのように接していただきたいか、お母さんとお話しします。全てが見通せるわけではありませんから、基本的なことをお話しし、「レッスンに通われるにつれて、気付いた事、していただきたいことをメールしますから、お母さんも気になったこと、私に聞きたいことがありましたらメールをしてください。」とお話しします。お母さんと会話をしている時、子供は会話に入りません。大きな紙を渡して「好きな絵、描いていいよ」と声掛けします。始めて来たので恥ずかしくって描けない子供、元々描くのが好きでない子供もいます。絵を描くことは自分自身を表現することにつながる大切なことだと思うのですが、年齢が上になるほどどうしても描かない子、描きたがらない子が出てきます。そういう場合「どうして 書かないの？」と言うのではなく、考えを表せる材料を与えるようにしています。私は大きな書店の保育教材のコーナーで売られているパネルシアター（図1）を使っています。シアター用の紙を色々な形に切り、色々な色を塗り、ケースの中に山盛り入れておきます。子供は、自然に、



(図1)

パネルシアターに貼り付けながら形を創り出していくことが出来ます。先生が色・形を提供することで、絵を描きたがらない子は1歩も2歩も前に進めます。このパネルシアターは、普段から教室の壁に立てかけてあるので、生徒は待ち時間に遊んでいます。中学生や高校生ですら、喜んで創っています。なかには「来週までこのままにしていってほしいわ。」と言って帰る生徒もいますが、また他の生徒が自分の作品を楽しそうに作り始めます。なかなか素晴らしい作品もあります。

「させる」のではなく、「しなさい」でもなく、出来る状況。「したくなる」「やってみようかな」と思える状況に持つていくことが大切だと思います。教室にあるものに自分から手を出すことで、自然に教室になじませられると思います。私が見学に来られた方々全員にお伝えしているのは、以下の点です。

- ・ピアノは週1回レッスンに来るだけで上手になるのではなく、家に帰ってレッスンで受けたことをどれだけ復習、実践していただくかが大切です。

- ・どのお子さんも得手不得手があるので、すんなりできる事もあれば何週間もかかることもあります。

- ・家での練習は、やる気のあるときもあればやらせたらしてしまうときもあります。その時に、ご自分のお子さんはどのような声掛けを必要とするのかを考えてください。「何度言えば・・・」と思われる場合は、そもそも声掛

けがお子さんにとって不適切ということです。

・一段階上に進む時期は、難しく嫌になることもあります。それを越えるともう一つ上のレベルの曲を弾ける

ようになります。お子さんにとって大変な時に「嫌ならやめる?」「練習しないならやめなさい」と簡単に

言わないでいただきたい。(これはこちら側からのお願いになります。)

後は個々に質問を受け、お答えします。ピアノに関しては私に託していただくのですから、信頼関係を作る努力をします。

入会をされる方の中には他の教室から移ってこられる方もいます。その方は、既にピアノの本やワークはお持ちです。なので、面談の日時を決められた時、「今、使っておられる本を持って来てください。継続して使うか、新たに本を選ぶかは、見せていただいて決めたいと思います。」とお伝えします。これから指導していく上で、方向性にそぐわない場合は本を変更しますし、他の本を足すことで補える場合は、足りない部分を補える本を追加します。

提案 初めからレッスンに入るのではなく、レッスンのまえに一度会っておくことは大事だと思います。私のところ

では「面談」と言います。生徒にとって、先生がどんな人なのかを見て、感じることも大事ですし、教える

側も、生徒になる人はどのような言葉に反応するのかという問題意識をもって観察し、どういう対応が望ま

しいかを考える必要があります。「レッスン時間はピアノを教えてもらう時間」と考えている方も多いので、面談はレッスンとは別日でとられるのが良いと思います。相手の人柄を知るには雑談も必要です。会話の中で、お稽古事としてピアノを選ばれた理由や、レッスンに望んでおられることをお聞きし、また、先生の方からも、どういう風に指導していきたいか伝えるといいと思います。その会話の中で、「この生徒さんはこの本で」と方針を先にたててしまうのが良いか、生徒の能力に合わせて臨機応変に取り組んでいく方が良いのか、ということを考えます。「自分の指導をどうやってこの生徒に活用していくか」を考える時間、行き当たりばったりでなく準備をする時間を持つことが大切だと思います。

基本指導の説明

それぞれの生徒が使う本は異なりますが、身に付けていただきたい事柄は同じです。本自体は一人一人の生徒にとってより吸収しやすい物を選びますが、これらはピアノ曲を演奏するための準備です。生徒が小さい子供の場合、あらかじめお手本の指の形は見せませんが、電子ピアノなら触ったら鳴るものの、ピアノのキーは重さがあるため、正しい指の下ろし方をしてもなかなか音が鳴らない生徒もいます。家で電子ピアノを使われている場合、家ではピ

アノは簡単に鳴るのに教室のピアノは鳴らないので、ついバンバンと叩いて遊んでしまう子供もいます。それをゆっくり弾ける方向に導いていく。そのためには、家でのご家族の協力が必要になってくるのです。私はお母さん方に「子供たちはそれぞれの項目に風船を持っています。どんな大きさの風船なのか、どれだけ膨らみます努力（考える・覚える・回数を重ねる）をしないと膨らまないのか、人それぞれなので分かりません。小さな風船ならすぐ膨らむし、大きければかなり頑張らないと膨らまない。でも、『どうやってもできない。』と思っていたことが突然できるようになる。そこまでの努力を教えたい。出来た喜びを味わわせたい。頑張ってできるようになった時に、『よく頑張ったね。』と声をかける。それが本当の褒めるといことです。」と言います。

提案 「音を読めるようになるためには」・「リズムを打つには」・「指番号をしっかりと見るには」等様々な課題があります。この指導方法で「Aさんが出来たからBさんも」というようにはいかないこともあります。どの方法が生徒にとって理解しやすいのかを把握するためにも、まず、生徒自身を理解する必要があります。

生徒と相對する時

人は、音楽を通して、思考も感性も生活態度も変化します。より良い環境を生徒に与えたい。そのチャンスが、指導

する側には与えられている。私を通して生徒の人生に入ってしまう可能性がある音楽。音楽が好きでピアノを習いたいと思った気持ちを損なわないように、習い始めた時の夢が壊れないように、見守る必要があります。そのためには

- ・初めて曲を見た時、すんなりと取り組める読譜力
- ・音符を理解し表現できるリズム感
- ・フレーズが歌える表現力
- ・ミスを少なくする集中力
- ・曲の仕上がりのレベルを上げる知識
- ・弾いてみたいと思う曲に対する音楽知識
- ・練習をこなす為に必要な時間を作る生活リズム

この7点が自発的に発展していくようにする必要があります。生徒を預かった以上、音楽が楽しめる位に弾けるようになってもらいたい。いくら習い始めた頃の進度が速く、よく弾けそうな人でも、すぐに辞めてしまっただけは、本当の意味で音楽の楽しさもピアノを弾く面白さも体感できません。音楽が楽しめるくらいに弾けるようになる

までレッスンを長続きさせてもらうことは、指導する側の責任でもあると思います。

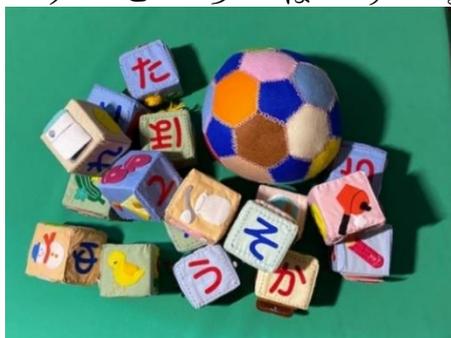
幼児・幼稚園児からレッスンを始めるときに

最近では、音楽教育を2歳・3歳から始められる方も増えています。ピアノのレッスンに入る前の段階として、個人レッスン「ピアノの前に」というコースを作っています。このコースでは、ピアノのレッスンにスムーズに入るための準備として知育教育をします。「ピアノの前に」のコースは、お母さんにも共に体験していただき、お子さんが進歩していくのを共に見ていただくのも目的です。音符は子供の眼からすれば奇怪な形の集まりでしかありませんから、いきなり音符を学ばせることはしません。形の判別・色の理解・簡単な知育教材（簡単なパズル、絵合わせ、積み木等）を使った形合わせ・線引き・円を描く・色を塗る・切り取り線の入れている線を手で切り取る・糊で貼り付ける等の経験をさせます。これらの作業は、指先を使うことに通じる準備運動的役割をします。また、リトミツク的なリズム打ち、音楽に合わせて歩く・走る・ジャンプする・色々な楽器を鳴らす、木琴、鉄琴、太鼓、タンバリン、鈴、ベル等を使って表現の第一歩の導入も行います。2〜3歳だと物をつかんでもすぐに放り投げる子供もい

ますので、始めに渡すものとして、布で作った物（図2）を出します。それで様子を見て次

（図2）

に出すものを考えます。幼稚園児の生徒が使う初歩の楽譜には同じ種類の音符が並んでいますが、本によっては全音符、2分音符、4分音符のいずれかが使われています。簡単そうですが、ここで手を振って「1、2、」と歩けるかが問題になってきます。3歳児前半の年齢では「出来る」「出来ない」にバラツキはあります。出来ない理由が、やったことがないか、知らなかったからにすぎない場合は、少し練習をすることで、自然に苦労無く身に付けさせることが出来ます。しかし、レッスン5回目位で歩行量を増やしたとき、歩行とリズムがバラバラになったり、始めからバランスが崩れてきたりすることがあります。「四分音符が並んでいる」ということは「1、2、が繰り返されているだけ」ということですが、ちゃんと歩けない生徒に、タンタンとか1、



2、とか言って拍を取らせても、解からないまま真似させているだけになってしまいます。また、歩く時の注意として、「膝が直角になる位に足を上げましょう」を言います。足を後ろに蹴るような歩き方や、床に足を擦って歩く生徒がいるからです。足をしっかり上げること意識をもたせる方法としては、突っ張り棒を生徒の膝の前に持って、「これを膝で持ち上げられるかな」をします。この時の注意点は、背中を丸めないようにすることです。オリジ

ナルグッズとしては、クッション性のある布を足型に切り、その足型を長い布の上に載せたものを作りました。

(図3) その足型の上に子供の足を乗せて、お母さんに布の両端を持ってもらい、ゆっくり垂直に子供の足の膝が直角になるまで上げてもらいます。子供に足を上げる感覚を

覚えさせるのが目的です。子供にとっては、お母さんが自分の足を動かすのがとても面白いようです。足でしっかり歩けないとリズム打ちも正確にできません。レッスンでは、歩く速さを変化させたり、ジャンプやスキップに対応できるようになるまで、歩く練習を繰り返し、しっかり歩けるようにしていきます。まだ歩くことがままならない幼児の場合は、お母さんに椅子に座っていただいて、子供を膝に乗せていただきます。ピアノで和音を弾き、拍を打ち、それに合わせて膝を上下していただきます。お母さんにはピアノレッスンに入ったときに、体で拍を理解することの大切さをお話しします。根本的なことです。「さあ！やるわよ」と構えて臨むのではなく、自然な体の動きの中で感じられるようになってもらいます。歩く練習と並行してお母さんに子供の脇に手を入れていただいて音楽に合わせてジャンプすること、子供を抱いて色々な速さで歩くこと、リズムを強調させた短い



(図3)



音楽に合わせて、子供の体を揺らしたり、飛行機の真似をしてお母さんの体の周りを回したり、といったことを、お母さん自身も体で拍を感じて動いていただけるようになるまで継続します。生徒の年齢によっては、その場では出来ないこともあります。しかし、耳に残ること、体に感じる事が大事なのです。子供はその場では判断できず行動できなくても、記憶として頭に残っています。家に帰られて2〜3日後に突然出来るようになっていくことがあります。

次に強弱ですが、「強い」「弱い」「大きい」「小さい」の意味を、何となくであっても感覚として解っている生徒には「大きい音を出して」と言うより、象の絵を見せて「のっしのっし歩いてみよう」と言い、次に「ドシンドシン」と足踏みをさせたり、ピアノのキーと一緒に叩いたりします。その方が、目で耳で、体で感じる

(図4)

ので、単に「大きく」と漠然と言葉掛けをするだけより、ずっと印象に残ります。印象付け、それから考えさせると、表現力の向上にもつながります。絵を見せて(図4)「大きく」「小さく」の判断をさせます。まず、ゾウ、ネズミ、鶏(ひよこ)、ハート、イチゴの大きな絵と小さな絵を用意します。大きい絵は強く叩き、小さい絵は弱く叩くことを教えます。それから、強拍、弱拍を組み合わせて叩かせたら、生徒に組み合わせを考えさせて大小の絵を好きに置かせ、



叩かせます。絵柄によって楽器を自分で選ばせます。タンバリンやカスターネット、ピアノの高い音、低い音で表現させてみる。基本の2拍子、3拍子、4拍子、6拍子は必ず組み込み、叩かせます。これが拍の種類を知ることにつながります。のちにピアノ演奏の練習に入ったときも拍子をしつかり感じられるように取り組みます。レッスンが進んで、行進曲や舞曲の演奏をするようになったときも、生徒によってはステップを踏ませます。例えば、3拍子が強拍・弱拍・弱拍となることを教えるとき、強拍を単純に強く叩くことを強調しただけでは、音楽になりません。頭で理解させることは大切ですが、本人の意識の中に自然に表現できる感覚として残さなければ、その生徒の表現段階に役に立たないのです。まず知識を与えますが、知識が、その生徒自身のものになるまでもっていくことが大事です。特に小さい子供の場合は、保護者の方にも一緒に楽しんでいただくことが重要になってきます。大人だから出来るとは限りません。家で一緒にしていたくときは、子供は楽しく、大人は正確さに気を付けて行っていたきたい、とお話しします。小さければ小さい程、体が自然に覚え、簡単に出来るようになります。ただし間違った指導もすんなり入ってしまうので注意です。この拍打ちに大きく貢献するのがタンバリンです。拍打ちの練習は叩くだけ。それだけで色々な変化が簡単に感じ取れるので、子供にとって面白い遊びになります。タンバリンはお母さんに持っていたいて、子供は真ん中の皮の部分の叩いたり、回りのシンバルを叩いて鳴らします。カ

スタネットは机の上に置いた状態でも叩けます。シンバルは音の切れをはっきり出せないので、歩く時に「手を振って、元気に歩いてみよう。」と言い、歩くのに合わせてタンバリンを叩いてもらいます。しっかり叩くと、自然に、足をしっかり上げることが誘導できます。左右に叩く部分がついているウッドブロックは、重さがあるので、お母さんに持っていたいただいて叩くのが良いと思います。片手で使えるタイプのウッドブロック（図1）は手首を上下すると鳴らせます。マラカスはある程度、身長があると使えます。自分に合った鳴らすものが決まると、次に名前の呼び合いをします。自分の名前から始めて、物の



名前、挨拶を加えていきます。例えば「こんにちは」を「こ・ん・に・ち・は」と5回、「こん・にち・は」と3回、「こんにちは・は」と2回、「こんにちは」と1回に変えて叩きます。単純なだけに、小さな子供も

（図1）

真似がし易いです。言いながら叩けるようになると、叩くこと重視から言葉を発する方にも課題を加えていきます。人は話すとき自分の声の高さの中間音を発します。「話しながら音をならす」にピアノの音を加えたとき、ピアノの音も中間音で始めます。和音の拍打ちを入れます。ピアノの音に合わせて「話しながら音をならす」が出来るようになると、音の高さやテンポを変えていきます。生



徒はピアノの音の高さによって自分の出す声の高さも変えようとしています。テンポを早くしたり、遅くしたりすると、生徒自身も言い方を変えて面白がり、飽きないという利点があります。また、生徒たちは、ピアノに誘導されている意識はなく、自分が発信している気持ちになり変化させていることをとても喜びます。生徒たちに「楽しい」「やりたい」という気持ちを持たせるのが一番必要なことだと思います。また、お母さんに協力していただくときは、言葉の発音に対して、意識せず話すのではなく、口の中や舌の位置に少し気を使って発音していただきたいとお願いします。単にリズム打ちに使う言葉だけに限らず、子供たちは発音を覚えるとき、一番身近な人であるお母さんの発音を真似てしまいます。子供はお母さんの発音そのものを真似るという意識を、お母さん自身に持っていたきたい。初めに気を付けて話せば、子供は自然と正しく発音できるようになるのですから、言葉を正確に発音させたいと思うのであれば、後から治す手間を考えれば効率が良いと思います。言葉は音楽のフレーズ作りにつながります。棒読みや無味乾燥な話し方は、フレーズを表現する際に役に立ちません。

私は、指番号を覚えることや手の形を理解することと並行して、色紙をちぎる、貼る、という作業もレッスンに取り入れています。指先を使う。少しずつでも指先に集中する気持ち



ちを養うことがとてもプラスだと考えます。指先を使う機会が増えると指を使う可能性も広がります。○の真ん中だけを塗っていた生徒には「○の線を始めに書いてみようかな」、手首に力を込めて色を塗る生徒には薄紙に○を書いて「この紙を破らないように色塗れるかしら」、指先だけで塗る生徒には、紙に○を書き「ここに色紙をちぎって貼ってみてくれる」、腕の動きが足りない生徒には、大きめの色紙を渡し「びりびりって破けるな」、と声掛けをしていきます。筆圧が弱く、しっかりした線が書けなかった生徒には、5Bの鉛筆を使って書くことから始めます。本人が「こうしたい、できるようにしたい」と思えるようになるには、まだ時間を必要としますから、持つ意識ではなく、こちら側が持たせていく意識で徐々に変化させていきます。ピアノを弾くときには「正確に見る」「楽譜を正確に表現する」「腕、手首、手の甲に力を加えない」と色々な注意があります。ピアノを弾く前の準備として使いたいのです。私は何をさせれば本人が気付かないうちに問題点を治せるか考えます。レッスンの時にピアノの前で始めから注意をするより、事前に問題点を解消しておく生徒も多くの注意を受けなくて済むからです。注意されることが少ないと「自分は出来るのだ」という自己肯定感に繋がり、また、少ない注意は受け入れやすくなります。



音楽を自分で表現するときは、表現の基盤となる経験が豊かであることが必要ですが、体全体が柔軟であることも必要です。それには、ボールを使います。ボールは色々な大きさ、硬さを用意します。「つかむ」、ボールをつかむときは指先でボールをとらえています。このボールをとらえている時の指先の状態が、ピアノを弾く時の指の支えがしっかりすることにつながります。ボールを転がしてそれを生徒がとる。この時も腕に力が入っていると、うまくキャッチできません。軽く投げて受け取るとなると、なおさら腕の柔軟が必要になります。少し弾むボールを「ついでみて」と指示した時に、手首が固いとき続けるのが難しくなります。ピアノを弾くときに、手首、肘、肩に力が入らないようにすることは、色々なテクニックを学ぶときにも、色々な音色を出すときにも乗り越えなければいけない課題になります。

提案 私は半世紀近く指導させていただいていますから、グッズもオリジナル教材も沢山あ

りますが、どなたも初めはゼロからです。初めて作ったオリジナル教材が「おけいこノート」

でした。それまで音楽科受験生中心の指導をしていて、「課題はするのが当たり前、出

来るまで頑張るものだ」という考えでいた私が、小学校3年生の女の子の指導をしたと

きのことでした。絶対に私が合格にしていけないハノンの曲に○がついていたのです。そ



の女の子は、ハノンの曲に3週程合格しなくて、その曲が嫌になったのだと思います。こんなことは初めてでした。私は、気付かぬ振りをし、対策を考えました。今のように、おけいこノートやレッスン連絡帳が書店に並んでいる時代ではなかったので、ワープロで生徒全員分のおけいこノートを手作りしました。宿題を書いて、「ここに気を付けて練習すれば上手になる近道」といったコメントを付けました。生徒が増えれば、その都度作って、年度毎に改定もしました。「1人の生徒に何をプラスすればレッスンがスムーズに運ぶようになるのか」という発想が、「オリジナル教材、グッズ」の原点です。生徒たちの目的（ピアノが好きで弾けるようになりたい・親に言われたから・友達に弾けるのを見て私も）は色々です。セミプロを目指すのはほんの一握りです。音楽が好き、ピアノが弾けるようにはなりたい、その気持ち自体を汲み取る必要があります。リズムを打たせたいとき、カスタネット、タンバリンは子供たちも幼稚園に通う年齢でしたら見慣れているので、ずっと手に取ります。喜んでしたがるのはウッドブロックです。マラカスは、単に振るのは面白がりますが、リズム表現は小さい子供にはできにくいので、楽器として紹介するに止めておいた方が良いでしょう。指先に関しては、生徒によっては、指先で何かをすることに慣れていない人もいるので、折り紙と折り方の本を置いています。生徒たちは、自主的に、待ち時間に喜んでしています。紙を折ることは「柔らかか頭」を作る役目もすると思っています。ピアノの指導は、曲を弾くのを指導するだけで

満足してしまつては、私が「こんな音を出してほしい」と思った時に、生徒にベースになるものが身につけていなければ、生徒がその音色を出すことはできません。

レッスンに入る時に

音楽教室はそれぞれの個性があると思います。だから　こうでないといけないという決まりはありません。でも、だからこそ、それぞれの教室独自のレッスンがスムーズに運べる決まりを作っておくべきだと思います。私の教室では「レッスンの形態」の項でも述べていますが、生徒のレッスン中は1人しか入らない入れ替え制は取らず、ピアノのレッスンの前後に楽典的なことを学んだり、音符を書いたり、教室にあるピアノ（サイレント付き自動演奏ピアノ・電子ピアノ）で練習したり、後述しますが、毎週の確認などを行います。だから　余計にピアノのレッスンを受けている生徒の邪魔はしてほしくないですし、かといって「分からないのに静かにしていなくてならない」では居る意味がありません。ピアノレッスンに入る前のリトミック的なことに重きを置くレッスンをする生徒は、明らかに他の生徒の邪魔になりますので、単独で、他の生徒とレッスンが重ならない時間に来ていただきます。この生徒も通常レッスンが出来る様になったと判断した時点で、レッスン時間を変えます。30分弱の個人レッスン（ピ

アノ、ソルフエージュ、個々に行うチェック)とレッスン前後でのワーク(楽典)をします。おのずと次のレッスンのピアノ曲を聴くことになります。自分の練習している曲だけでなく、他の人の練習曲も自然と耳に入ってほしい。順から行くと後の時間の生徒のほうが年上なのでいずれ弾く可能性のある曲が多くなります。聴いたことがあるのは大事だと思います。兄弟姉妹で習われている場合、下のお子さんの進度がスムーズなことが多いです。上の子供にとっては全てが初めての経験ですが、下の子供は上の子供の音を聴いているので、スムーズに受け入れられることが多いです。これを活用したいので教室にいるときの守ってほしい約束を作りました。

- ・ピアノのレッスン中はあなたが優先

- ・ワークをしている時は静かにしましょう。

- ・分からないことがあるときも、できたときも、ピアノレッスンの生徒の曲の本が変わる時に「できましたか？」

と声掛けしますから少し待ちましょう。

この3点です。

保護者の方が、「レッスン時に付き添ったほうが良いのでは。」と言われた場合、生徒が字の読めない年少児の場合を除いて、別にどちらでも良いと伝えます。また、私の教室には車で来られている方も多いのですが、そういう

方には、「教室でお待ちくださってかまいません」と伝えます。但し、極力、自分自身の事をしていただき、生徒への口出し手助けはできるだけ遠慮していただくように言い添えます。ワークなどで保護者の方が間違いを見つけるのと先に消される場合があります。それは最終的には生徒が損をしていることになりますから、間違えたままワークを提出させるよう言います。熱心なあまりワークをしているお子さんに口を挟む声が大きくなる方もいます。先ほどの、守っていただく3点は大人の方についても同じなので、注意させていただきます。

ついて来られた方がレッスン内容を理解されたい場合、携帯で動画を撮っていただくこともあります。宿題を出したけれども間違えた練習をしかねない生徒については、保護者の方が来られていなければ、動画を撮ったり、音声録音したりして、それをメールで送ります。同様に、宿題が分からない場合、分からない箇所を写メで送っていただいて、質問してください。よう伝えていきます。教室には自動演奏ピアノがあり、USB録音が可能です。帰宅後パソコンで確認するのに使う生徒もいます。

生徒がワーク（楽典）に関して質問してきたときに、それが、既に説明は受けているけれど



(図2)



(図1)

忘れている場合は、まず、問題の前のページを見るように言います。それでも分からないとき、小学3年以上でしたら、教室に置いてある楽典の本を出して読むように言います。音の長さに関する問題が分からない場合は、音符積み木(図1)を使います。まず使い方の説明をします。音符積み木は市販されているもので、積み木の高さは同じですが音符や休符の長さに合わせて積み木の長さを変えてあります。だから、体積が変わります。説明の時に、音符積み木を使った足し算、引き算も教えます。

例えば、「2分音符―8分音符||付点4分音符」(図2左)(2分音符の上に8分音符を置き、2分音符の上の空いているところに合う音符を探します。)|「2分音符+4分音符||付点2分音符」(図2右)(2分音符と4分音符を横につけて並べ、その上に乗る音符を探します。)|どうすれば分るか方法を提示します。1度で理解できない生徒もいますから、「忘れた」「分からない」という生徒にはワークの度に説明します。教室に年齢が上の生徒が居合わせれば、分かる範囲でアドバイスするように言います。これは年齢が上の生徒の復習にもなります。兄弟ですと、下の子のほうが進んでアドバイスします。自分の知っていることを伝えられるのが嬉しいようです。もう少し上の年齢になると、教室に置いてある本で自主的に調べています。現在はパソコンで何でも直ぐに調べられます。でも、本で探すことで、そのページに書いてある他の事も目に入ります。それがきっかけで、より多くの知識に興味を持てるか

もしれません。教室には様々な年齢に対応した楽典関係の本を用意してあります。他に、作曲家、歴史、色々な関連することをピックアップしたファイルを生徒に見えやすい所に置いてあります。教室ではピアノレッスン以外にも色々な事を教えます。教則本ですが、他の補足の本もワークブックも個々に合ったものを選びますので、進度によつては、ある生徒は学んでいるのに別の生徒はまだ学んでいない事が出てくる場合があります。ピアノの本は進んでも、必要な知識や技術について生徒が「聞いたことがない」、「したことがない」と言うのでは、取りこぼしを見過ごしていることになります。だから、私の教室では生徒に基本「音読み」「リズム打ち」「聴音」「知識力チェック」「初見奏」をさせます。小学3年生以下には「ソルフエージュ」「歌」を行います。

色々なことをしますが、やっているのが自分だけだと「何故こんなことをしなきゃいけないの?」になります。他の生徒もするので、当たり前のこととして受けいれています。スムーズな進行の為にも、あえて他の生徒と同じ課題に取り組みせませす。その月に行った課題の結果は生徒に渡す「毎月の手紙」に載せませす。生徒の名前が載ることで、それを励みに頑張ろうと思う生徒もいます。全員に同じレベルの課題をやらせると、高学年の生徒の名前が載るのが当たり前になってしまうので、学年により内容を分けたり、「この学年以下」と限定して難易度を変えることで、どの生徒にも名前が載るチャンスを与えています。また、個々に得意分野があるので、得意分野の課題で評価

されたりすることが、生徒を成長させます。

(速度)

(繰り返し記号の仲間)

(音名・音符休符を書く位置)

(コード)

標目	読み	日本語訳	テンポの目安
Large	ラージ	静かに速く	80
Molto	アールジョ	速く	
Allegro	アールジョ	速く	
Letto	レト	速く	12
Andate	アンダテ	適度に速く	108
Moderato	モダート	適度に	
Moderato	モダート	やや速く	120
Allegretto	アールグレット	やや速く	
Allegro	アールジョ	軽快に速く	132
Animato	アニマト	速く	
Vivo	ヴィーヴォ	かなり速く	152
Vivace	ヴィヴァーチェ	かなり速く	
Presto	プレスト	非常に速く	184

Handwritten musical notation on a green background. It features several staves with notes, rests, and various repeat signs (first and second endings). There are also some annotations in Japanese and symbols like 'ff' and 'mf'.

Handwritten musical notation on a green background. The notes and rests are highlighted in various colors: blue, red, and pink. There are also some annotations in Japanese and symbols like 'ff' and 'mf'.

Cmのつくり		Dのつくり	
① Cm	F G A Bb C	Rm-5	
Cm7	F G A Bb C	F	7
CmM7	F G A Bb C	F	M7
② Cm7-5	F G A B C	Rm-5-7	
CmM7-5	F G A B C	F	M7
③ Cm7-5	F G A B C	Rm-5-7	
CmM7-5	F G A B C	F	M7
④ Cm6	F G A B C	Rm-5-6	
Cdim	F G A B C	Rm-5-6	
① D	F G A B C	R-3-5	
D7	F G A B C	F	7
DM7	F G A B C	F	M7
② D-5	F G A B C	R-3+5	
D7-5	F G A B C	F	7
DM7-5	F G A B C	F	M7
③ D7-5	F G A B C	R-3-5-7	
DM7-5	F G A B C	F	M7
④ Dsus4	F G A B C	B-4-5	
D7sus4	F G A B C	F	7
⑤ D6	F G A B C	B-3-5-6	

レッスン初歩段階での決まり

音の色

・教室ではド(赤)・レ(黄)・ミ(緑)・ファ(オレンジ)・ソ(水色)・ラ(ピンク)・シ(紺)で表しています。

音に親しんでもらうために、触感や大きさの違うグッズを色々用意します。

図1 発泡スチロールに色紙を貼ったもの

図2 グルーガンで作ったハート

図3 板に色を塗って5線を書き、ト音記号またはヘ音記号と音符を書いたもの

図4 粘土板に色を塗ったもの、色を塗りドレミを書いたもの、粘土をハートで型抜きし色を塗ったもの、

「色プラ」というお湯で柔らかくなり、冷えると固まるプラスチック粘土で丸にしたもの

図5 ボードに丸い穴を開け裏にプラスチック板を貼ったものです。この穴に合わせて、ドレミの色に合わせた色粘土の円形の板を用意します。

図6 図5の丸を抜いたときに出来た円にドレミを書き、5線を書いたボードにはめつけたものです。白抜きにするために黒マジックを塗っています。ト音記号・ヘ音記号は5線と切り離してるので、5線の上下を変更すれば高さを変えられます。ト音記号でト・・・ニ、ヘ音記号でろ・・・へまでの練習ができます。

図7 市販のプラスチック板。

図8 市販の発泡スチロールのカラーボール

図9 ブラバンで作った物でドレシの色でハートを塗って音の組み合わせをしています。

図10 発泡スチロールの板を重ねて、音の階段を作りました。

図11 鍵盤に色を塗り切り離したものです。

それぞれのグッズの使い方の説明をします。

図1 後記の導入教材「おとなかよし」でドレミを色で表すことを教えたときに理解できたか確認するために
並べてもらうのに使います。

図1

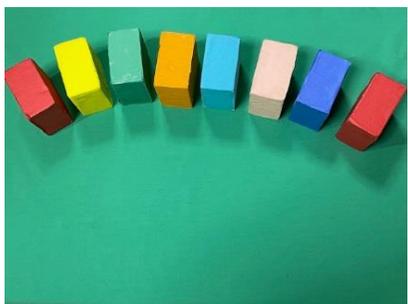


図2



図3



図4



図5

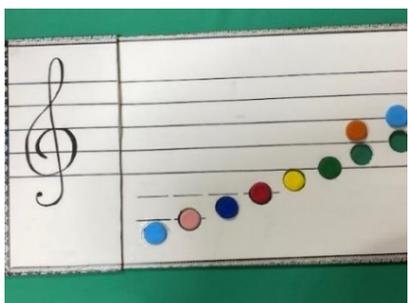


図 6

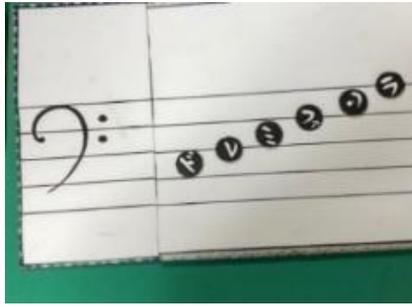


図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 2 貸し出しをしています。子供の腕が通せる大きさですのでアクセサリ感覚で遊んでくれます。

図 3 始めは音順の色並べに使用します。音読みが出来るようになってくると、それぞれの板に高さの異なる音を書いてあるので並べるとき高さも見ると言うように使います。

図 4 同じ音を集めたり、種類別にドレミを並べたりします。

図5・図6 空いた穴に色粘土の円の板をはめていくのですが、あらかじめドの赤の円の板をはめておきます。

そして、ドから上にレミファとはめていきます。次にドから下のシラソをはめることで、ボード全体を見るようにさせます。自分で円の板を置いていける生徒は本人に任せますが、そうでない生徒の場合は、ド以外の円の板を1つはめてやり、ヒントを与えます。へ音記号も同様にします。図5と図6ではボードの上下を入れ替えて使っているので、図5でト音記号を置いたときは「ソラシドレミファソラシド」図6でト音記号を置いたときは「ラシドレミファソラシド」の確認に使えます。以上の事が出来た後に、文字をはめていきます。

図7 図8 色並べに使用します。他のものと組み合わせて使うことで、なかなか覚えられない生徒にドレミを覚える練習回数を増やすために使います。

(ソフトゴムバンド)

図9 ブラバンで作ってあります。音符カードの色版です。1枚1枚手に取って使います。小さい子供の手の中に納まる大きさです。

図10 ボードを貼り合わせてドの音の階段を作ってあります。順に音が高くなっていくのを視覚的に理解してもらおうためのグッズです。

図11 鍵盤の並びが分かっているか確認のためのものです。音の色を塗ってあります



リズム

・音符の言葉は1拍がタン、休みはウン等のように決めます。

・若い生徒は右手・左手がまだはつきりしません。右と左を分かりやすくするために腕にピンクと水色のソフト

ゴムバンドをはめてもらいます。右手はピンク、左手は水色で表します。これを分かってもらおうと、教える側も

習得する側も迷わずに済みます。

・リズムは「タ」「ア」「ン」「ー」「ウ」で書けますのでまだひらがな、カタカナがスムーズに書けない生徒の場合、

「字を書くのを練習してみる?」と声掛けし、「してみたい」と言った生徒にはカタカナ練習の用紙を作って

渡します。カタカナの一覧表を見ながらなら書ける生徒には表を見てまねてもらいます。書けない生徒の

場合は私が書きます。

次に図1から図8の使い方の説明をします。

図1 基本的なリズムです。声を出して「タン」「ウン」を言いながら手、またはカスタネットを叩きます。

図2 表面に音符、裏面に言葉を書いています。言葉を読んだら、音符を見ながらリズム叩きの練習ができます。

カードを組み合わせて練習もします。

図3・図4は 2拍の組み合わせです。図3は小さい生徒用、図4は大きい生徒用です。

図5 リズムと言葉の組み合わせです。例えば「クレープ」を見せて5線ノートにリズム譜を書かせます。言葉を言いながらリズムを叩く、リズムを見て叩くなどの練習に使います。

図6 棒が上に伸びるものと下に伸びるもの、それぞれについてリズムを書いています。組み合わせることで、右手左手、手足でリズム叩きが出来ます。

図7 板に引き出しの取っ手を付けたもので、取っ手にカスタネットを引っ掛けます。赤∥強拍・青∥中強拍・木の色∥弱を表します。赤・木の色と並べると強・弱になります。拍子を感じてもらうのに使います。2拍子から8拍子までカスタネットの数を覚えて取り付けられます。

図8 パネルシアター用はリズムを書くのが不織布なので色々なリズムが書きやすいです。リズムを叩かせるときリズムの種類を直ぐに取り換えられるので指導のとき、難易度調整がし易いです。

図9 マグネットボード用はマグネットシートに音符や休符を印刷したもので、ホワイトボードに張り付けて使います。長さによってシートの重さが変わりますから（長いと重い）長さの比較を感じさせられます。主にリズム説明に使います。



図 6

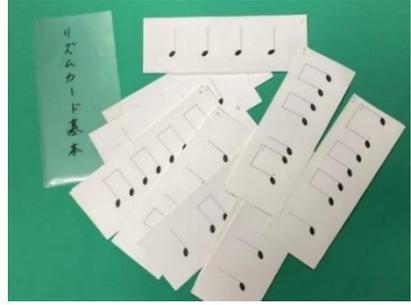


図 1



図 7



図 2



図 8

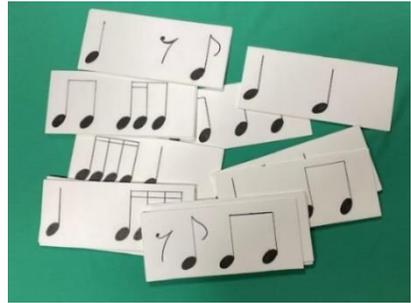


図 3



図 9



図 4

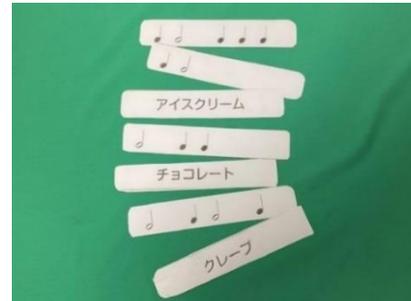


図 5

リズム叩きは、両手で同じリズムを叩くだけでなく、同時に右手左手別のリズムを叩く練習もします。そのとき、右左の理解を簡単にするために、ソフトゴムバンドを使います。本によっては、始めから両手奏を目的として、1つのメロディを右手左手交互に使って作ってある曲がありますが、そういう場合、棒の向きだけで、右手か左手かの判断を求めることが多いです。生徒の中には右手左手どちらで弾くのか分かりづらいときに、慌ててしまいどちらの手で弾くのか分からなくなる生徒がいます。そんなときのために、前もっての練習で「右手ピンク、左手水色」と決めておき、楽譜をピンクと水色に塗り分けれます。更に、右手にピンク、左手に水色のソフトゴムリングをはめます。ゆっくり楽譜を見ながら指示しますので音符と同時に指番号も視野に入ってくる利点があります。指導するに当たっては、生徒が理解しやすいということが1番です。リズムを「タン・ウン」で表すということを言いましたが、リズムに入ったとき、例えば四分音符・四分音符・四分音符・八分音符・八分音符が出たら「ぎゅう・にゅう・ドー・ナ・ツ」と声に出して手を叩く。そしてピアノを弾く。既にリズムを言葉で表すことをしていますので、違和感なくでき、リズムもきっちり表現できます。これは年齢が上になり、より困難なリズムに出会っても活用できます。例えば、4拍子で3連符が4拍出て来た時「リンゴリンゴリンゴリンゴ」と同じ言葉を4回言わせると、その言葉自体が鮮明でなくなる可能性があります。「りんごカメラみかんパンダ」など異なる言葉を使った方が早く正

確に言え、リズムを正確に表せます。

生徒にとって困難なことをいかに簡単に出来るように導くか、自分でも工夫出来るようにするのが指導する側の大切な点だと思います。「出来ないの？仕方がないわね。じゃあ出来るまで練習しましょう。」では、生徒の進みを遅らせているだけにしか過ぎないと思います。難しいリズムが楽譜に出て来た時に自分で解決する方法を教えてください。これは、将来生徒が感じるであろう難しさを和らげると思います。

音について

音は色カード（図音1）から始め、次に2音カード（図音2）を渡します。このカードは、表に音符を2つ黒で書き、それぞれの音に対応した色で表と同じ音符を裏に書きます。2音カードに書かれた音をスムーズに答えられるようになると、今度はマイカード40枚（図音3）を渡します。この40枚カードには、ト音記号の「ト・ド・レ」へ音記号の「ろ・る・り・ト」の音符を書き、裏には片仮名で「ド」「レ」など音符の音を書きます。最初はト音記号のものを5〜6枚渡し、渡したカード全てを1分間でどれだけ言えたかで枚数を徐々に増やしていきます。最終的に40枚渡し、1分間で25枚答えられれば教室の音カードに参加します。

図音1



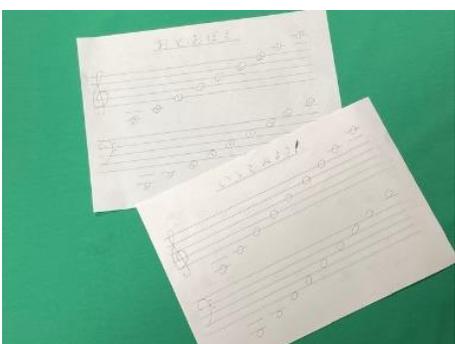
図音2



図音3



図音4



教室の音カードは後述しますが、「40枚カード」「2音カード」「3音カード」「5音カード」と毎回レッスンの時に何枚言えるか順にチェックし、それぞれすべて答えられれば手紙に名前を載せるものです。マイカードが中々覚えられない生徒には「覚えましょう表」(図音4)を渡します。線の音をト音譜表で「ドミソシレファラド」、ヘ音譜表で「ソシレファラド」と、呪文のように口ずさみ、覚えてもらいます。

導入期

私は、就学前の生徒さんには全員に導入グッズを渡します。小学1年生以上の場合には生徒に応じて渡します。

内容は

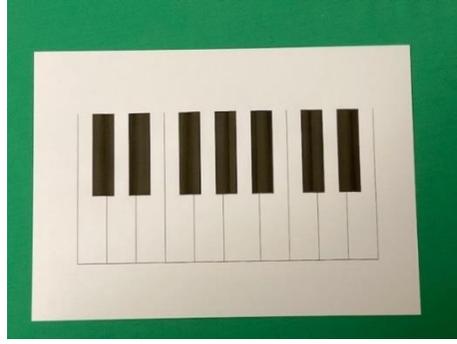
- 1 けんばんシートと色カード
- 2 けんばん楽譜
- 3 おんがくノート(市販の鍵盤付き5線ノート)ヤマハミュージックメディア
- 4 おととなかよし
- 5 ゆびノート
- 6 音符カード(色カード↓2音カード↓40枚カード)
- 7 リズム叩き

ここでは 内容の説明を兼ねて進めていきます。

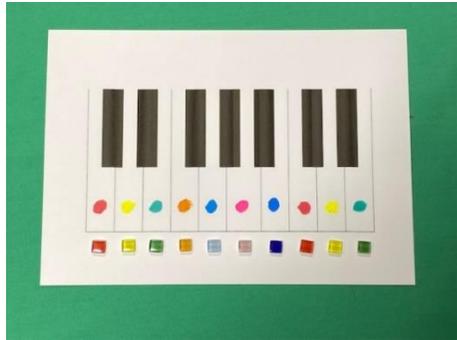
導入グッズ

導入グッズでは、この7つは並行して進めていきます。

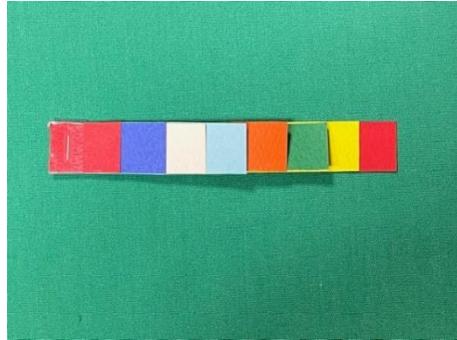
図鍵盤 1



図鍵盤 2



図鍵盤 3



図鍵盤 4



1 けんぱんシート

生徒にけんぱんシート（図鍵盤1）を渡し、黒鍵が2つあるところと3つあるところがあることを確認します。

それから1つずつ「ド レ ミ ファ ソ ラ シ ド」と言いながら対応する鍵盤に色を塗ってもらいます。（図鍵盤2）。教室では色タイルを使用するので、それも置いていきます。それぞれの音に対応させる色は、導入グッズで共通させます。また、紙でドレミファソラシドの色順に厚紙を並べた手の平サイズのカード（図鍵盤3）を作り

ます。これは音の並びがきっちり覚えられないまで使用します。後で説明する4「音と仲良し」で使うタイル（貸し出し）も渡します。拡大の鍵盤でもドレミ〜が言えるか確認します。

提案

私の教室ではドレミと色をリンクさせるグッズとしてタイルを使っていますが、厚紙を切って使ってもいいですし、また、鍵盤ノートの色塗りについても、色塗りの代わりに色シールを使っても良いと思います。導入期に必要なのは、指先を使うこと、指先に意識を持たせることです。遊びの延長線上に指先を使う機会を多くすると、ピアノレッスン時に役立ちます。

2 けんばん楽譜 (図鍵盤4)

けんばん楽譜はピアノの鍵盤とト音譜表・ヘ音譜表の関係を分かってもらうためのものです。

レッスンを始めてすぐに理解しなければならぬものではなく、頭に残っていれば、いつか理解できるものだと思います。まず「ド」の学習から始めます。「ド」の鍵盤に赤色を塗ります。生徒には真ん中のドの位置を指差す者もいれば、鍵盤上の全てのドを見つける者もいます。1度に全てのドを塗って音符を書いてもらうのも良いですし、1つだけ塗るのも良いと思います。無理強いはしません。あくまで生徒のペースで進めることです。このときに市販

の鍵盤付き5線ノートに鍵盤に色を塗った音を全音符で書き、音符を書く練習をします。この練習は「・ハ・ロ」で行います。1つのドにしか色を塗らなかつたということは、結果的には、もう1度復習が出来るということです。そのときは、残り2つのドを、前に塗った鍵盤を見て探し出して塗ります。ドからシまでを毎週1音ずつ塗っていきます。7週で終了する生徒と14週で終了する生徒がでます。ドからシまでが終わると復習の意味で間の音だけ、線の音だけを塗っていきます。間は1番下の鍵盤から1つおきに鍵盤の色を塗っていきます。既にド・シまで仕上げたページがあるので「分からない時は前のページを見て探してみようね」と声掛けをします。その後、鍵盤の色を確認しながら5線に音符を書き込んでいきます。5線からでも鍵盤からでも、音を理解できているか確認するために、線の音は音符を先に書いてもらいます。それから鍵盤にその音の色を塗ります。同時進行で鍵盤付き5線ノートに音を書く練習をします。下についている鍵盤に色も塗ります。この段階では全音符練習しかしません。間に丸を書くことと、線の上に丸を書くときは、上下の線に当たらないで書くことの練習を十分にしてもらいます。「音」のところで説明した色音符カードにも1音ずつ書き込みをしていきます。

ト音記号の下1線のドと、ヘ音記号の上1線のドが同じドであることを伝えます。それをすんなり受け入れられる生徒には、さらに5線ノートにト音記号へ音記号を書き大譜表にして、ピアノの楽譜はこの大譜表を使うこと、ト

音記号のドはト音譜表の5線寄りに、へ音記号のドはへ音譜表の5線寄りに書くということ、両方とも真ん中のドであることをピアノの鍵盤とともに確認します。

提案 生徒に鍵盤と5線の関係を見せると良いと思います。ト音記号の第1線・第2線・第3線・だと「ミ・ソ・シ」です。1つ飛ばしで音が分かると、音読みの段階で音を読みやすくなります。音を読むことに困難さを感じにくくすることは、導入期に大切なことです。

4 おととなかよし

「おととなかよし」は 音の位置を理解し、「線と間」を学んでもらうための教材です(図1)。これも音に決められた色を使っています。ドの上がレ、ドの下はシというふうに、ビジュアル的に音同士の関係を理解する方法で進めていきます。音は帯と○で表し、生徒には○に何の音が入るかということを考えさせます。このとき、生徒にはけんばんシート(図鍵盤2)か、手に持てる色カード(図鍵盤3)を持たせます。読みの練習の宿題を出すときは○に対応する色タイルを貸し出します。例えば、ドの列(図1左赤の列)を宿題にしたとき、ドが4つ、レが4つ、シが3つ出てきますので、赤のタイルを4個・黄色のタイルを4個、紺色のタイルを3個貸し出します。宿題が読めれ

ば貸したタイルは返却させ、次の列に対応した色タイルを貸し出します。ドとレとミはすぐに結びつくのですが、「ドの下がシ」だということが定着するまでに時間のかかる生徒が多くいます。けんばんシートで繰り返しドレミファソラシド・ドシラソファミレドと一緒に声に出して読んでシに色を塗るのが良いと思います。何度も何度も繰り返して言っても、忘れてしまう生徒もいます。お母さん方は困り顔をされますが、先生は「難しいものね。」と優しくずっと付き合ってください。タイルが置けるようになれば色を塗ります。後半にある色無しのページ(図3右下)には「せんにいろをぬってかんがえてみましょう」と書いています。けんばんシートを生徒に見せて「この中で好きな色は何色?」と聞いて塗ってある色から選ばせて下さい。「好きな色は何色?」だけだと白や黒など入っていない色を言う生徒もいるからです。説明では(図3左下)オレンジ色を選んだ場合をとりあげています。オレンジ色は「ファ」ですから「ファ」の上の音には水色の「ソ」、「ファ」の下の音には緑の「ミ」の色を塗ります。次の3ページは 間を色で表し音が無色の○で表しているページです。音の並びは繰り返されているという事を理解するのが目的です。必ず生徒と一緒に指でさしながら読みます。タイルが置けたら色を塗ってきてもらいます。色が塗れたらもう1度一緒に読みます。次の4ページは、矢印の向きに音を読んでいく物です。(図4)ドレのページは横に並ぶと同じ高さだということを理解してもらおうものです。ですから1音上がるとレであることの理解を促し

図 1

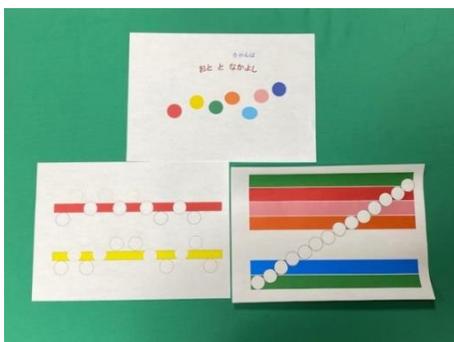


図 2

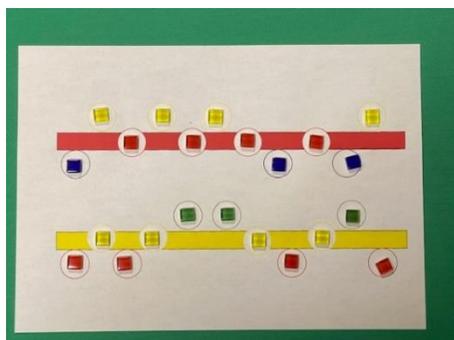


図 3

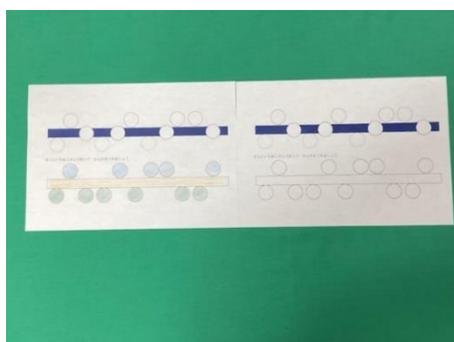
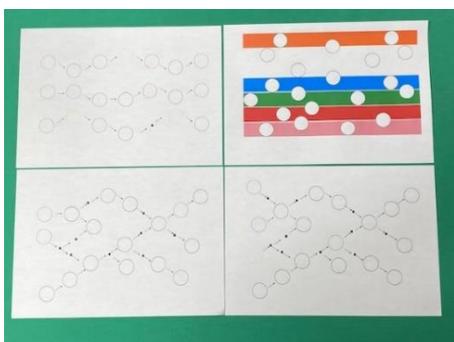


図 4



ます。小さい生徒場合、1人で読むとき、同じ音が続いているのに「音が変わっているはずだ」と思い込んでいることがありますが。やはり一緒に読んで読めるようになってからタイトルを置き、置けてから塗ります。塗るのは宿題にします。次週にもう一度一緒に読むようにします。同様に残りのページもしていきます。色を塗る方法で説明を進めました。平仮名やカタカナが書けるようになってうれしい時期の生徒には、平仮名又はカタカナで書いてもらいます。

提案 タイルは色がきれいなものと7色揃ったので使いました。おはじきは他の色が混じるのでやめました。

直径が2 cmの円の中に入る、子供が手に取りやすいもので、子供が好むものを選ばれるのも、先生のカラーが出て良いと思います。

5 ゆびノート

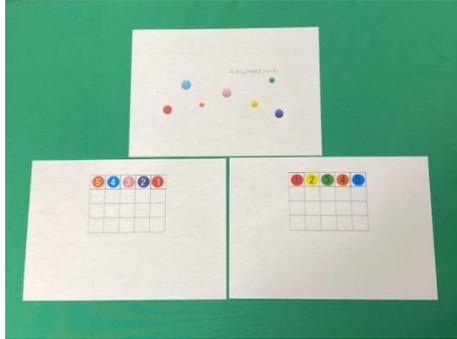
ゆびノートに入る前に、生徒に自分の手を合わせさせ、以下のような声掛けを順に行います。「お花のつぼみを作って。」「少しつぼみが膨らみました。」「今度は、右手の指先と左手の指先をこつんと合わせましょう。」「手元は離れないように、右手と左手の爪が平らになるようにしましょう。」「指を順番に離して、元に戻してコツンをしてみよう。」「初めはお兄さん指。」「お母さん指。」「お姉さん指。」「お父さん指は指先全部でコツンをしなくて良いから指先の半分以上でコツンが出来ればいいですよ。」「最後に赤ちゃん指。」「では、右手の平と左手の平をペタンと合わせてください。」「ピアノのレッスンのとき、お父さん指、お母さん指とは呼ばないで、お父さん指は1、お母さん指は2、お兄さん指は3、お姉さん指は4、赤ちゃん指は5と呼びます。」と言います。それから画用紙で作った大きな手を見せます（図指1）。この手は表面が右手、裏面が左手になっており、それぞれに指番号が書いてあります。

これで指番号を教えます。

図指 1



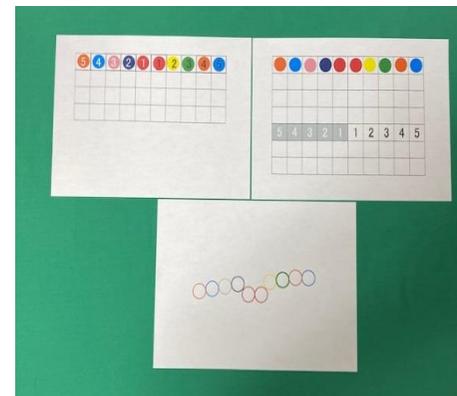
図指 2



図指 3



図指 4



次に「ゆびノート」を出します。始めの何も書かれていないページに生徒の両手を置き、生徒の手を鉛筆でなぞります。このようにして生徒の手形を書きます。そして、「今度から指のことを1 2 3 4 5で呼びますから覚えてください。もし、分からなくなったら自分の手を合わせてみてください。手前から1 2 3 4 5です。」と声掛けをします。その後、先ほど書いた生徒手形に、指番号を書きます。その際、右は赤色、左手は黒色というふうに区別して番号を書きます。それから、指を動かす練習をします。生徒に、自分の手形の上に手を置かせ、パターンパターンと指の付け根

から指の上げ下ろしをさせます。付け根は紙につけたままで行います。足の付け根から動かすクロールの足の動きと同じです。「12345」と指番号を言いながらゆっくり行います。それが出来れば「指の1節目で紙をくすぐってみよう」と言って指先で紙をひっかかせます。パターンパターンもくすぐりも1本ずつ独立して出来るまでには時間がかかります。なかなか出来ない場合は「指番号も覚えていこう」と言って、次のページも並行して行います。次のページは右手のページです。(図指2) 12345の数字を書く練習もさせたいので、空欄のマスを3段設けました。1段目に書かれている数字に被るように手を置いてもらい手形を書きます。「手形の上にも数字を書いてきてね」と伝えます。手形を書くのは、このページでもパターンパターンとくすぐりの練習をするためです。次は色々な大きさの右手が向きを変えて描かれたページです。(図指3) それぞれの指に番号を書いていきます。どういうふうに置かれても、右手の指番号が分かるようにするためです。左手も同様に行います。右左が終わると次は両手に入ります。マスを合わせて両手の手形を書き(図指4上) 数字を書いてもらいます。この頃にはパターンパターンとくすぐりがかなりできるようになってきていますので、このページで最終チェックをします。それから、始めのページに戻り、手形の上に手を置かせ、丸く猫の手にさせます。角度のない半円になることを目で見て理解させ、上から鉛筆で「あなたピアノを弾く時の指の位置」と書きます。指がパーの状態からこの位置にくるように練習します。次に(図

指4下)のページに進みます。右左の指番号を書いて「トン・トン・パツ」と言って手の置き方練習、指の置き方練習を行います。「トン」と言って手を膝に置き、次の「トン」で机、「パツ」で紙に書か

(図指5)

れた○に指が乗せられるようにします。このとき、机の高さは、肩に力が入らず手が自然におけるようにします。力を入れずに指を軽く置くようになるまで宿題にして毎週

行います。これは、指の置き方 支え方の練習です。次に、色の丸(図指5左)に数字を

書いてもらい、今度は「トン・トン・右手の5」と言うように声をかけて練習してもら

います。小さい生徒の場合、咄嗟に右か左かを判断できるかどうかから始まります。

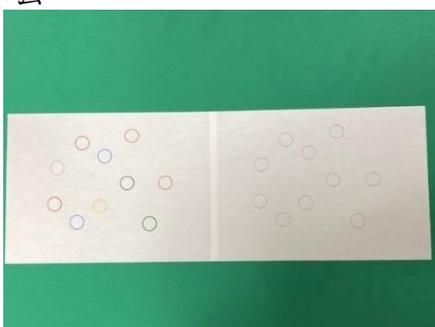
すぐに判断するのが難しいので、ピンクを右手にブルーを左手に、生徒は前述したソフトゴム

バンドをはめて行います。これも十分に出来るまで宿題にして、毎週行います。最後に、好き

な黒丸に右左の指番号を右手は赤、左手は黒で書いてもらい、(図指5右)復習の形をとります。これは、短期間に

してしまわないといけないものではなくて、十分に理解してもらえばいいことなので、出来るまで、生徒が嫌にならないように気を付けながら、繰り返し行います。

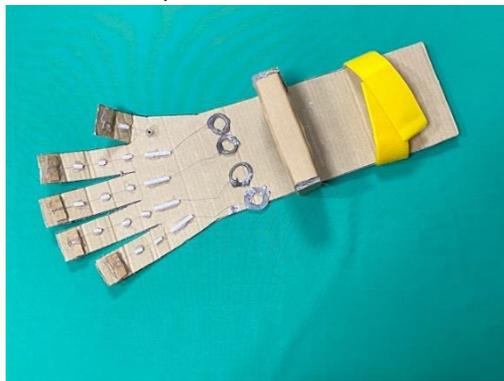
早くからピアノを弾くだけになると、ピアノを弾いて音を出したい気持ちで先行してしまい、手の形も指の置き方



も、いい加減になりがちです。小さな手ですし、手自体に重さもないので、キーに指を落とした時に、指の支えができにくいのです。だからこそ、早い段階から方向性は示すべきだと思います。そして少しでも近い形が見えた時は、「そう！」と言って褒めてください。すると、生徒の手が、指が、それを覚えてくれます。(図指6)

提案

子供に対し、先生が握りこぶしを作って骨の山が出来るのを見せ、そこから指が出ていること、指には関節が2つあること、2・3・4・5の指は根元が同じで動く方向も同じだけれど、1の指は独立していて動く向きも違うことを見せてください。野球ボールでもテニスボールでもいいです。先生がつかみやすい大きさのボールをつかんで、スツとボールを抜き、掌がグツと窪んでいる様子を見せて、指先に力が入ると手はこんなふうになるのだということを伝えてください。ボールをつかんでいるときは、落とさないように指はしっかりつかんでいるけれど、腕と手首は自由に動くことも見せてください。ボールをつかんでいるときの手の甲の中を見せるためにこんな物を作ってみました(図指6)。手首を黄色のバンドで止めて指先に輪をはめて、黄色色のバンドと輪の間のバーを握ります。



すると、手の甲の中がギュッと縮んでいくのが見えます。子供は喜んでやりたがりです。レッスンの時にも「あの時の手」で伝わります。肩や腕に力を入れずに指先で弾けることを体感していくことが大切で、先生がふにゃふにゃの手や指で弾いたときの音と良い状態で弾いたときの音の両方を弾いて聴き比べさせるのがよいと思います。

6の音符カードは後述の「音」で、7のリズム叩きは後述の「リズム」で説明します。

本の選び方と注意事項

私は楽器店の楽譜売り場によく足を運びます。最近は店に楽譜自体をそれほど置かなくなりましたので、ネット検索もよく使います。「立ち読み」機能で中身の何ページかが見られるようになっていて本が多くあります。今、楽譜は種類も多くなっていますし、新しく出版される本も多くあります。出来るだけ多くの本に目を通したいと思っています。それぞれの本の差を知っておくと、生徒に使える本のバリエーションが広がります。本には、目安として、初級・中級・上級、又は第1課程・第2課程・第3課程等の区別が書かれている場合がありますが、幅が広く設定されていますので、鵜呑みにして生徒に使うことは出来ません。生徒によって「使いやすい本」「使いにくい本」がそれぞれ異なりますから、生徒の好みを理解しておく、レッスンで生徒の指導をしやすい本を選べます。私が本を

見る場合

- ・楽譜自体の大きさ
- ・5線紙自体の大きさ・太さ
- ・音符の大きさ
- ・紙質（紙がつるつるピカピカ用の紙であるだけで絵本のように感じて本を開こうとします）
- ・カラーか白黒か（生徒がきれいな色で描かれた絵を見て想像を楽しみたいのか、曲が終わる毎に白黒の絵に色を塗るのを楽しみにしているかで使い分けます）
- ・絵が多いか少ないか（絵が少ないだけで、「難しい本」と認識する生徒がいます）
- ・絵の内容の違い（生徒の好みの絵は異なります）
- ・進むスピードがゆっくりか早い（1冊の本の中で繰り返し復習しながら進んでいくのが良いのか）
- ・片手中心から入るか否か（私は、基本的に、始めから両手奏の本を使いますが、生徒は「片手」と言うだけで「簡単」と感じるようなのでメインとなる本に加える本として使います。）
- ・1点ハから音が広がるもの（音読み練習でなかなかカードが進まない生徒は、カードをト音記号の・ハ、・ニ、

・ホ、へ音記号は・ハ、ロ、イ、と順に渡すので、その順に音が出てくる本が使いやすいです。）

・1点ハ、カタカナハから平行して始まるもの（音読み自体はスムーズに進められる生徒に向いています。）

・指番号を中心に進めるもの（指の支えがしっかりしていないときに1本ずつ指のチェックをするために渡しますが、5指で弾く音が「右手1はド」というように決まっている本があるので注意してください。音を読まないで指番号だけで弾こうとする生徒もいますので必ず音読みをする必要があります。）

・曲に言葉が付いているもの（よく知られている歌の歌詞がついていると「歌いながら弾けるようになるまで練習しよう!」とか「弟や妹が歌うときに伴奏ができるかな。」などの声掛けで練習量を増やせます。）

・単音・フレーズ・和音の取り上げ方（短いフレーズが明確に書かれていると、息をすることの指導ができます。）

・和音の種類（本によってはI・IV・V・Vの7の和音しか出てこない本もあります。その場合、別の本で色々な和音の学習を加えるか、生徒がレッスン中に弾いている曲に和音伴奏を付けることが必要になります。）

・リズムの種類（4分の3の場合、4分音符が3つでタンタンタンですが、8分の3は8分音符3つでタンタンタンです。リズム練習で練習を行っても弾く曲に出てくる方がリズムをより理解しやすくなります。）

適度にリズムの種類の多い本の方が、本が進んでいったときに自然にリズムを理解しやすくなります。）

・有名な曲が中心か新曲が中心か（「弾いていたらお父さんが『聴かせて。』と言ってきた。」など、ご家族が興味を持たれるきっかけになります。）

・どういう時代の曲を多く取り入れているか。（これは和音の種類にも影響します。偏るなら別の本で学習します。）

・カノンを取り入れているか（得手不得手が如実に出ます。苦手な生徒の場合、簡単に短い曲ばかりのカノンの

本を渡し、慣れさせる方法をとった方が、インベンションに入りやすくなると思います。）

1人1人に対して、じっくり1つ1つ取り組んでいった方がよい人、色々な事を少しずつ学んだ方が効果のある人などの性格や、練習に取れる時間など、色々なことを考慮して本を選びます。また、レッスンを始める時、その生徒に対しての方針が定まらないときは単純な内容の本のほうが良いと思います。理由は生徒に何かをプラスしたいと考えたときや、ピアノのレッスンを始めるに際して、マスターしておいてもらいたいと考える事柄がでたとき、生徒はどれだけの量を把握し理解できるかによって、それぞれの先生が生徒に与える内容を操作できるからです。様子を見て、次に渡す本の内容のレベルを決める参考になります。ピアノのレッスンをしていく上で身に付けてほしいテクニックは、段階を踏まえて見守っていく形を取ります。生徒は「手の小さい人」「大きい人」「指の太くしつかりした人」「細く華奢な人」「指の長めの人」「短めの人」と色々です。年少の生徒については、今、しつかり

音を出すことより、これから先、しっかりした音が出せるように指導することが大事です。無理をさせて指を鍵盤に叩きつけさせるのは決してしてはならないことです。ところが、選ぶ本によってはおのずと無理を強いる事態が起こってしまいます。そうは言っても、全て希望に添った本を見つけるのは難しいので指導する側で本の内容を修正します。例えば、手の小さい人、華奢な人に選んだ本に和音が多く出てきた場合、その生徒が弾ける範囲に音を省略します。離れた音が連続でスラーをかけられて出てきた場合は、無理にレガートに弾かせるより、スタッカートでキーの上に指を確実に置くことを優先します。本は、あくまでレッスンを進める方法の1つです。生徒に合った本を選べば、より効果的なレッスンになります。でもそれ以上に、指導する側が生徒の状態を把握し、本を使いこなすことが大事です。本はあくまで指導者のアシスタントの1つです。

松井音楽教室での本の渡し方



始めに本を渡すとき、教則本的なもの、指の準備体操的なものを渡すようにしています。小さい生徒であれば、今まで手は物を持つかスプーンの動きしかしてこなかったと思います。まだチョコキの形が出来ない生徒もいます。それなのに、急に、今まで全くしたことのない指の動きをするのです。生徒が真っ白な状態でレッスンに来ている

ことを忘れてはいけません。「出来て当たり前」は無いのです。1つ1つ確実に身に付けていく喜びを生徒と共有すればいいのです。出来るようになることをあせらない。でも、じっとしているのでなく、先行して道を開いていけばいいのです。

歌うことの好きな生徒には、歌を取り入れたものを選びます。5指の移動無しで弾ける部分だけを弾き、後は声を出して歌うことでカバーする本もあります。「バーナム」の様なテクニク的なものや4小節単位の簡単なものもあります。入口は難しくせず、出来ていくうれしさを感じてもらうことが大切です。その為に次の項目「毎週の確認」が活きてきます。私は 出来るだけ右も左も同じように扱って練習をさせ、両手奏にも早く入るようにしています。指の体操的なもの・教則本・曲・テクニク、次にエチュード的なもの、そしてカノンを多く取り入れたもの、または古典期の曲を多く入れたものどちらかを増やすようにしています。曲の本には色々な時代の音楽を取り入れるようにしています。教則本によっては和音の種類に限られている物もあります。不協和音も聞いておく必要はあります。アメリカの作曲家の作品などは選びやすいと思います。

本の進め方としては、エチュードはツェルニー100番レベルの本を渡します。譜読み、指番号を正確に守れるようになると、カノンを多く取り入れたもの、または古典期の曲を多く入れたものどちらか1冊を渡します。これ

はツェルニーなどのエチュードと古典期の曲の指の運びが異なるからです。ツェルニーなどは、指くぐりなどが入って、いかに音の流れを滑らかにするかという課題が多いですが、バロック系の曲はフレーズごとをまとめる番号指示の箇所が多くあります。指番号を守るようになった頃には、違った指の動きに慣れたほうが良いと考えます。ツェルニー30番は100番レベルの本が3分の2ほど進み、バロック系の本も半分位進んだ頃に渡します。本の量が増えますが、ツェルニー30番は、1番ごとに求められるテクニックの課題がそう多くありません。そこで、「曲の全部を課題にし、最終まで弾けたら次の曲に進む」というのではなく、曲の3分の1くらいまでを課題にし、そこまで弾けるようになったら、次の曲に進んでいくようにしています。30番まで済ませるとツェルニー40番を平行してレッスンに取り入れます。3分の1ずつを終了した30番の方は1番1番を通して弾き、可能な生徒は続いて暗譜をします。小学校高学年以上になると塾がかなりの時間を拘束し、中学生以上になると部活が増えます。ピアノレッスンを続けられる状態を提供するために、暗譜する曲の数を減らすこともあります。40番の方は曲の4分の1程を弾いていきます。40番と30番は交互に宿題に出します。以前は初めからツェルニー30番を通して練習するようになっていたのですが、30番が終わる前にレッスン自体を止めてしまう生徒がいました。色々なテクニックを知ってほしいので曲全体を弾くのは、ツェルニー30番の全部の曲が3分の1ずつ終わってからに

しました。40番になると異なるテクニックの形の組み合わせになるので鍵盤に置く手の位置が変わります。この方法だと次々と曲を進められますので色々なテクニックを習得し易くなります。何よりも、最初に曲に取り組んだときは曲の3分の1しか弾かせていないのに、ツェルニー全体を終えていることで力が付き、曲の通しの宿題を出したとき、一度でこなせるようになったり、暗譜も苦勞なくできる生徒も出てきます。ツェルニー30番の10番過ぎくらいに大概バロック系の本が1冊終わります。ここからは「バッハアンナマグダレーナ」に入る生徒とバッハインベンションに入る生徒に分かれます。バッハインベンションは、右脳左脳の両方を刺激して理論的に考える力を養えます。ですので、生徒によって渡す時期を考えないと「難しい本」という印象になってしまいます。チェンバロ・ハープシコードの時代の曲なので、指番号の使い方もツェルニーとは異なりますし、ノンレガート、メゾスタットカート理解が必要です。どの曲も時代の違いを考えずに指導することは避けたいと思い、理解度によって「バッハアンナマグダレーナ」や「バッハ小品集」を渡します。

曲の本は、生徒がどの程度練習時間をとれるか、習得したテクニックを生かせる本か、息を使えるようになってるか、フレーズをより歌える方向に指導できているか、少し難しい曲が多く編集されている本が良いか合格しやすレベルの本が良いか等と言ったことを考えて選択します。課題全てが本人にとって「大変」では意欲を失う生徒

もいます。生徒本人をよく見て、既に渡している本を全体的に見て、新しい本を渡します。

曲は表現力を養いますから、楽しい曲は楽しそうに、悲しい曲は悲しそうに聴こえる音を出す必要がありますが、これはエチュードの練習とはまた違った課題だと思います。だから、生徒本人が表現力を養い易い本を選ぶと、練習を自発的に行うようになりエチュードの進みもよくなります。

幼稚園に通う前の生徒

教室では、色合わせや色々な材質の物に触れる、つかむ、音楽を聴く、音楽に合わせて体を動かすことなどをします。生徒にはヤマハの「ミツキーと一緒に 音の絵本1」を渡し、家でBGM的に本についているCDをかけていただくようにします。「ピアノランド1」も音楽がついているので、ピアノを弾くのでなく、音楽に合わせて歩いたり手を叩いたりしてもらいます。(ただし録音媒体がフロッピーディスクなので、教室で再生した音楽をスマホで録音していただき使ってくださいています。) いずれピアノを弾くとき、記憶にある曲なのでスムーズに弾けるようになります。「エポニーとアイボリーのピアノの国1」はお母さんがピアノを弾ける場合に渡します。生徒は、お母さんの弾くピアノに合わせてピアノに触れたり、手を叩いたりします。子供の目線で見ると、いつものおもちゃは手の

中に入る大きさだけど、ピアノは巨大。子供がピアノを自分のテリトリーに入るものにしていく準備を、お母さんと一緒にしていくのです。

幼稚園以下の生徒の場合、始めはオリジナルの導入グッズ、歌の本、ソルフェージュが主になります。リトミック的なことを多くしますので、生徒の体力を考慮し、ピアノの本としては「幼児用　ぴあのどりーむ」「ミフィーシリーズ」を渡します。この2冊は共に音の動きが少なく、弾いた音が耳に残ります。大人が弾いたのを聴く、大人は読みながら弾く、生徒が歌いだしたらピアノと一緒に座って生徒の指を持って弾かせてみる。弾かせるのが目的なのではなくて、音感を育むのが目的のレッスンです。幼児には、ゆっくり、じっくり、音楽の世界に入ってもらういます。

幼稚園児に渡す本

幼稚園児の場合、年少と年長ではかなりの差があります。集中力でいうと、年少は2分、年中は4〜5分程度です。すぐに目も体もウロウロします。ですので、指導のポイントは、いかに集中が途切れるまでに指導したいことを済ますかです。年少には「ミツキーと一緒に　音の絵本1」・「ピアノランド1」をBGM的にながすことで音楽が耳に残る状態を作ります。また、リズム叩きや歩くなど体を動かすときの音楽としても使います。「ミフィーシリーズ」

は絵とそれに合う2小節ほどのメロディーで構成されています。始めは主になる本として渡しますが、直ぐにサブ扱いにして使います。「エポニーとアイボリーのピアノの国1」はお母さんお父さんとピアノの前に一緒に座ってピアノを弾ける本です。「びあのどりーむ1」は1曲が短く、音の動きが少ないですし、絵がかわいいので女の子は好みます。年中、年長は運指として「バーナムミニブック」か「びあのどりーむ」を渡し、どのくらい練習をこなせるかを見て渡す教則本を考えます。

教則本

初め運指と音読み目的で渡した「びあのどりーむ」「ピアノランド」を生徒が使いやすいようでしたら、5巻前後まで使います。「ピアノランド」は音源がありますので携帯に録音していただきます。ただ色々な速度を録音していたのでなく、インテンポでしか録音せず、その速さで生徒が弾くには速いので「曲のイメージを感じましょう」的に使います。「だいすきなピアノ1」は両手奏ですが共に単音で、鍵盤が書いてあり、弾く音のキーに指番号も書かれています。少しずつ難易度を上げて2〜3回1つの曲にチャレンジする形になっています。単音ですから本人が弾けた時点で連弾譜を弾き、響きを聴かせることができます。「バステインオールインワンプリマーA」と「ピアノ・アドヴェンチャーA」は5線が出てきません。黒鍵を使うメロディから始まり、白鍵を使うようになって、鍵

盤が書かれ、弾く位置が示されているので、幼稚園児・小学1年生は始めの本として使い易いと思います。「バーナムピアノ」「ラーニングトゥプレイ」は音が少なく読みやすいです。「ぼこの会 みんなのおけいこ」は序盤のうちには音符の代わりに絵が使われています。リズム打ちがタンバリンや鈴の絵とともに描かれていて、幼稚園の男の子に使いやすいです。「ピアノの本1」轟千尋作曲はのんびりした生徒に向いていると思います。1曲1曲が短く、絵もカラーで柔らかい色調です。「わかるピアノ」はテクニック練習も含まれ、本の数を多くしたくない場合に良いと思います。「リラ・フラッチャー」は導入教材の時点で、手や指の形、音読みに時間をかけた生徒が入りやすいと思います。「はじめの1歩」は、「ゆびノート」で練習した「グーパー」の指先を立てて手を支えている状態で3の指から1つ1つ弾きます。少し指自体がしっかりしている子供に向いています。「アルフレッド」は黒鍵を弾く練習から始まるので2、3本の指の高さをまとめて保つことが出来ます。「オルガンピアノ」は、音符も大きく音も「・ハ」から広がるので全般に使い易いですが、色付きではありません。「トンプソン小さな手の為のピアノ教本」には「小さな手」とありますが、進度が早いので、しっかりした年長さん向きです。「トンプソン1」は落ち着いてピアノに向き合える小学生に渡します。「ジョンブリムホール」はしっかりお勉強をさせる系統の本です。「グローバーピアノ教本1」は、調・拍子・リズム・重音が計画的に出てきます。エチュードも含まれます。小学生2年くらいであれば

ば受け入れがスムーズだと思います。

エチュード

ツェルニー30番につなげる準備の位置づけの本です。

「ゆびの体操」はハノンの短い版です。「ピアノスポーツ」「バーナム」は8〜12小節くらいの長さでテクニックが学べ、題名がついているので、「こんな風なときはどう弾く？」という声掛けで、生徒にイメージを持たせられます。楽譜が大きく見やすいのは「子供のツェルニー」「ミッキー子供のツェルニー」です。凝縮間のあるのは「ツェルニー練習曲1」「子供のツェルニー100番」「テクニックをつけよう」です。「新子供のルクーペ」は学ぶ曲のスケールが始めにあり、それを練習してから練習曲に入ります。小学2〜3年生以上に渡しますが、スケール自体、片手では指番号を守って弾けても、慣れるまでは両手で弾くのが大変です。練習曲に入っても、小分けして宿題を出しじっくり取り組みますので、単純に○が欲しい生徒には向きません。練習時間をきっちりとれる生徒は「サブリエクササイズ」か「あたらしいピアノテクニック1」を使います。「このリズムで練習しましょう」という課題があります。生徒のその時その時の状態に応じて、リズムを変更したり、生徒によっては右だけの練習、始めから両手で指定されたリズムで弾く、など臨機応変に使うことができます。

バロック

「インヴェンションの前に」は幼稚園児にも渡せる短い曲で、なじみの曲でのカノン練習ができます。「バッハへの道」は小学校低学年向きだと思うのですが、音符が小さいので生徒によっては拡大コピーをして使うこともあります。「ビギナーズポリフォニー」は聞いたことのある曲のカノン集です。「たのしいポリフォニー」「やさしいインヴェンション」は右左の手が同じレベルでハーモニーを扱うので簡単ではありませんが、小学3年生以上ならこなせると思います。生徒のレベルを見てバロックの曲をレッスンに取り入れる必要があります。小学校高学年になって私の教室に移ってこられた生徒で今までカノンの曲を弾いたことのない方の中には時々、他のピアノの本は進んでいて、ある程度、難易度のある曲を弾いているのに、カノンの曲になると『弾けない、左のフレーズが歌えない』という方がいます。「I・IV・V」などの和音伴奏に慣れ親しんできた生徒が、近現代以降に出てくる和音で伴奏が作られている曲に出会った時と同じように戸惑いの状態になります。右手左手が、今までは「あなたがメロディー、私は伴奏」と役割分担していたものが、同等扱いで「あなたがメロディーの時は私が伴奏を受け持つから、私がメロディーの時はあなたは伴奏を受け持つてね」と急に宣言されたようなものですから、右左を十分に練習させ、右左同じような弾き方が出来ているか、右左のメロディー部分だけ抜粋して弾いた時、曲の流れが出来ているか、この

本に載っている曲の弾き方をじっくり理解してもらおう必要があります。「たのしいバロックアルバム」「バロックをひこう」「古典派を弾こう」「黒河バツハ」「バツハアンナマグダレーナ」は生徒によってはもう1冊カノン形の本をした後でインベンションに入ります。「プレ・インヴェンション」はじっくり練習をする生徒に。この本はインベンションにつながります。

曲集

「funfun ピアノステージ」は5指の移動なしで弾けます。「わかる曲集」は、曲が短く、メロディーが同じで、左手奏が変えてあるだけの曲が並べてあるので、生徒に弾ける感を与えます。「バステインクラシックメロディー」は有名な曲を載せている本で、生徒自身が知らなくても家族の中の誰かが知っている曲が多く載っていますので、家族から「こんな曲も弾けるの〜」と褒められることで生徒の自信につながります。「やさしい4期の名曲集」は名前のおとおり4期の曲が分別されて載っています。楽しむというよりこれから先につなげるための本です。「アルフレッド」「バステイン」等テクニク・エチュード・教則本・曲・ワークが1セットで出版されている本は、生徒によって、教則本と同じシリーズを使った方が良いか他の本で補充した方が良いか考えて渡します。

ワークブック

4才以下の生徒には、始めに導入グッズをしてもらいますが、1ヶ月くらい経ち指先に意識を持たせることを始めたい場合は、「おんがくあそび1」（ヤマハミュージックメディア）がシールを貼ることから始まるので使い易いです。この本では、シール貼りのあとは、4Bから5Bの鉛筆で書く練習に入ります。生徒の状態に合わせて2に進みます。「ミッキーと一緒に」は音符を書く練習から始まります。「音楽カラードリル入門1」は鉛筆を持つことに慣れる本として、ワークの1冊目として入門1だけ使う生徒も多いです。「びあのどりーむ 幼児用」「びあのどりーむ 1」（学研）はリズム叩きが多く含まれています。リズム叩きでは、私の膝を右手左手で叩いてもらいますが、これは生徒とのスキンシップの役割もします。音読みの苦手な生徒や、書くことが好きな生徒には「わかるワーク」（ミュージックランド）の導入・基本・発展が 各々1・2・3とありますので、その生徒に適した巻から渡します。この本は、進行がゆっくりです。また、ページの上に説明はありますが、わずかです。学習を総合的に進めたい場合は「音楽ドリル ワークブック」を使います。説明のあとに問題が設定されているので、「問題の答えが分らなければまず前のページを見ましょう」と指導できる本です。「わかるひろがる音楽ドリル」は説明なしで音の学習と楽典的な学習が進む形式なので、必要に応じて、先生が生徒に合わせて説明をする必要があります。これらの1巻目が終わる頃にオリジナルテキストの「わかつているかな」を渡します。

生徒への声掛け

・宿題をもう1度弾かせたいとき、「もう1回弾いてみて」と言うと生徒は嫌がります。そこで、私は「ラストチャンス」と声掛けするようにしています。

・ある個所が出来ない場合、「ここが出来れば・・・他は良いのに。来週合格しよう!」と言うと、半分くらいの生徒が「もう1回弾かせて」と言います。

・弾くのを躊躇して音が出せない生徒には、「先生、横で弾いて良い?」と声掛けをします。私がオクターブ下で弾き始めると、生徒は私の手を見ながら弾き始めます。

・本に注意を書かれるのが嫌な生徒には「もう1回弾いて弾けたらチェック書かないね、間違えたら来週までに直してほしいから書くね」と言います。

・練習量は少ないけれどプライドは高い生徒は否定をされるのを嫌がります。そこで「音もリズムも見れているから、題名から曲を考えてみよう!もっと楽しい音楽だと思うんだけど、楽しい音楽にしてこられるかな」と、良かった点を見つけ、前向きな言葉でレベルアップを促します。

・「忙しくて」「弾く時間がなかった」と言い訳する生徒の大半が、新しいことを始めるのが苦手な生徒です。です

から、「宿題の片手を弾けるようにして帰ろう」「この小節まで両手練習しよう！ 次のフレーズはここが弾けたら弾きやすくなるから」などと声掛けして、宿題に取り組み心理的なハードルを下げます。宿題を出すときには「どれだけなら出来る？」と聞きます。例えたった4小節しかできないと言っても「じゃ、がんばろう」と言います。すると、生徒の大半が余分に練習してきます。練習してこない生徒は弾いてこないだけなので、レッスンの時「ここまで弾いてくる約束だったからここで弾けるようになろう！ そうしたら次の宿題出せるから」と声掛けをします。「試験中だけど。」と言う生徒も、「練習はできていないけど弾きに来る。但し、ピアノのみでワークとかはなし」という条件を出して来ます。「練習しなくても済まされる」と生徒に思わせたい。とはいけない。「ピアノの先生は弾けない時も弾けるように協力してくれる」と生徒に思ってもらいたい。

・生徒が「練習を凄く頑張った」と言うことがあります。練習をあまりしない生徒からすれば、レッスン前日に20分した練習が自分にとっては「凄く頑張った」なのです。その一方で、毎日20分練習する生徒は、2日間用事で練習できない日があれば「今週は練習が出来なかった」と言います。それぞれ嘘はついていないし、どちらの言葉も認めます。ただ練習をあまりしない生徒からすれば前日の20分の練習でさえ「頑張っても私は出来ない」という自己評価に繋げる生徒がいます。「どっちみち私はできない」といったネガティブな言葉

の発しは生徒自身をネガティブな方向に導いてしまうので、宿題の出し方に注意します。難し

い曲であれば、曲を4小節ごとに分割して「難しくてもできる」という体験を繰り返させると、「どこまでしてこられる？」という問いかけに対して生徒自ら量を増やしてしてくるようになります。ただ、そんなときも、生徒のキャパシティをオーバーしないように気を付けます。ワークで直ぐに「分からない」と言う生徒に対しては、以前説明したときに使ったページや「知ってることノート」を開いて「この時は分ったって言ってたから、もう1度自分で読んでみて。それで分からなかったらもう1度説明するね。」と声掛けするか、その時間帯にその質問に答えられそうな生徒がいる場合は、「このお兄ちゃん（お姉ちゃん）が教えてくれるから聞いて。」と言いい、お兄ちゃん（お姉ちゃん）の生徒には「あなたは理解できていると思うからお願いします。ただし、答えは絶対言っちゃダメよ。」と頼みます。これは生徒同士の信頼関係を育み、お兄ちゃん（お姉ちゃん）自身の自信につながるので生徒双方にとって〇です。

生徒と対するときの心構え

練習は、今出来ていない事をできるようにするためのものです。教える側は、生徒に何を与えればできるようにな

るのか、理解した上で指導することが大切です。生徒がピアノを習い始めた時点から、生徒の宿題のこなし方か、練習に向き合う姿勢、性格をよく見ることが、指導する側には必要なことです。楽譜を見て単に弾いているだけなのか、どのように弾けるようになりたいかを考えて弾いているのかで、練習効果は大きく変わります。生徒への言葉のかけ方も変わります。同じ練習時間内に効果の有る練習が出来るように、そして指導する側にとって大切な事は、先生自身の持っている空気が優しく温かいことだと思います。例えばどんなに指導している事が出来なくても、怠け者になっているときでも、ゆっくりと温かく言葉をかける。今の時点でできる事を見つけてあげる。普段から生徒を深く理解する洞察力が根底にあれば、その生徒に何をすれば良いかはおのずと見えてきます。叱る。注意を十分に言う。伝える必要であっても、感情的になったり 怒りを出したりしてはいけません。ガツンと言う時も、頭ごなしではなく生徒自身が「これはまずい、自分が悪い」と感じさせる言い方をします。ときには、ピアノのレッスン自体が生徒自身のためのものであり、周りの協力があって初めて受けられるものなのだという感謝も教える必要もあります。レッスンは先生やお父さんやお母さんのためにしているのではなく、生徒自身のためのものであることを自覚させないといけません。

指導する側は、生徒の3ヶ月・6ヶ月先の状態を考え、それに向けて指導すれば良いのです。そうすれば、今補わな

ければならない生徒の問題点がよく見えてきます。

提案

生徒は直ぐに必要なないピアノの音を出したがりません。全面禁止はしないでください。生徒は先生がピアノ椅子と一緒に座って音を出すだけでも納得します。「鍵盤をグーで叩いてみよう」と声掛けをして2つの黒鍵や3つの黒鍵を叩かせます。このとき先生は、生徒の手首に力が入っているか、手全体の重さや、手がふにふにやしてはいないかなどを見ます。生徒の横に先生が付き、生徒の適当な音に合わせてI・IV・V・Vの7の和音の種類で伴奏すれば、それを音楽にすることができます。「優しい気持ちで鳴らしてみよう」「元気に」「悲しく」「犬が走っているように」等、気持ちや情景を考えるヒントを与え弾くことで、生徒は自分が音楽を作れているという気持ちを味わえます。拍が一定に打てるようになると、グーから2と3の指で2つの黒鍵を弾かせます。このとき、指はグーから軽く開いた状態で弾かせます。同様に、指3本で3つの黒鍵を弾かせます。多くの生徒にとって3つは大変です。掌を下から軽く押し上げてあげて「丸くしようね」と付け加えます。事前に手の形を教えていても、弾いている時は弾くことに気持ちも眼も向いているため気が付かないので、その時々チェックするのが良いと思います。

オリジナル教材

「わかっているかな」(図1) これは音符や休符の名前、拍の長さを教えるものです。

音符・休符の名前、例えば2分音符の中に4分音符はいくつつ入るか、言葉ではどう表すか(この場合はターアーです。)を書きます。長さの枠を虫食いにして、音符なり休符なりを当てはめます。

「音符と休符」(図2)「わかっているかな」で学習したことの確認です。

生徒はものの見事にすぐ忘れます。先生の方での確認は必要不可欠です。

図1

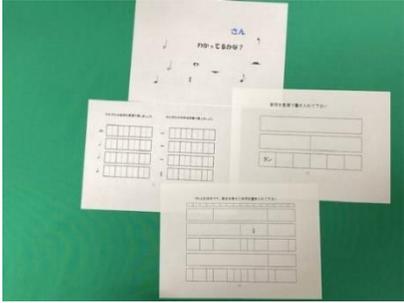


図2



図3

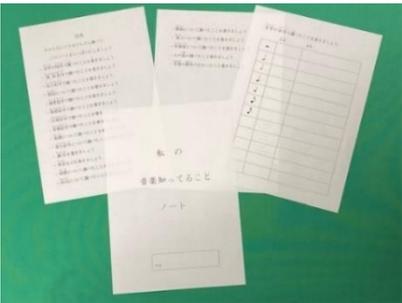


図4

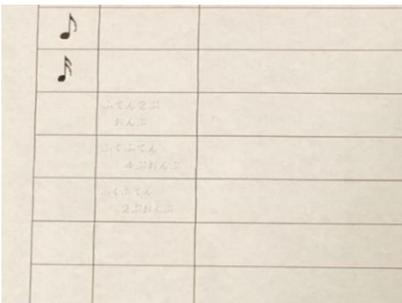


図5



「知っていることノート」(図3・図4)

これは生徒個人の辞書です。音符休符、強弱、表現記号、速度記号等、自分が学んだことを自分の手で書き込んでいきます。基本的なものは薄い字で書いています。自分で興味を持ったことについて、書き込むスペースも十分あります。レッスン時にまず各週の確認チェックをして、まだ「知っていることノート」に書き込めていない場合は書き込みをし、既に書き込んでいるけれど答えられないとき、他のノートに書いて練習をします。

図5 理解を確認するためのオリジナルグッズで、音符・休符・長さ・名前を横1列に並べるものです。難易度は高くないので、全員出来るものです。

「音階ノート」(図6)

長調短調について指導した後、生徒が「理解できた」と思えた時点で渡します。長調「全・全・半・全・全・全・半」短調「全・半・全・全・全・半全・全」の説明を載せ、書かれている音階を書かせ、先生が添削します。

「60枚プリント」(図7)

私の教室では5月から新学期とする形をとっており、4年生の生徒には5月から「ジュニアクラスの楽典問題集」(ドレミ楽譜出版社)を渡します。ただし教室に通った期間が短く楽典に入る基礎知識がまだ少ない場合は

「ジュニアクラスの楽典問題集」に入るのを遅らせます。この本は各項目ごとに説明が載っていて、その説明を読んだ後にその項目の問題をしていく形で作られています。ピアノを始める大人で基礎も学びたいと希望される方や、音楽科の受験のために教室に通い始めた高校にもお勧めできる本だと思います。

続けて「楽典基本問題集」（東京音楽書院）のⅠ・Ⅱに進みます。Ⅲに進むかどうかは生徒に任せています。これらの本とは別に、全員の確認用にオリジナルの「60枚プリント」（図7）を使います。プリントの内容は、ピアノ

図6

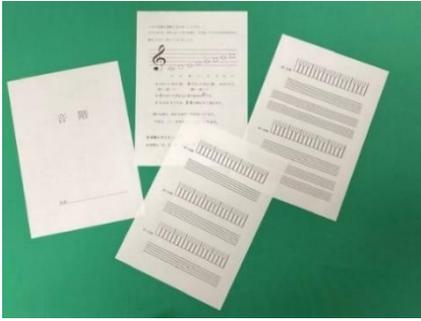
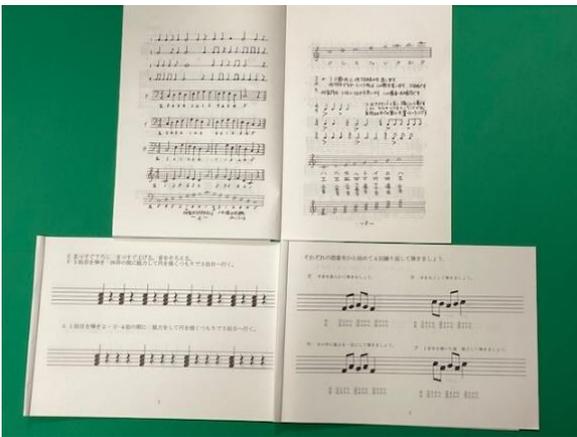


図7



図大人1



の練習において、知っておくと何かと役に立つ知識です。繰り返し学習することで生徒の中で「知っていて当たり前」、「簡単なこと」になっていきます。総復習のテキストです。

提案

生徒は、わざわざ楽典を勉強しなくても、教室に来て待ち時間にワークをするだけで専門知識を覚えていくことができます。「学校の友達が知らないことを自分は知っていた」がちょっとした自信につながります。試験があるわけでなく、期限が決められているものでもありませんから恐ろしいほどすぐに忘れます。そのため、教える側はゲーム感覚で履修させると良いと思います。指導する側には、あの手この手で生徒の頭に知識を刷り込む方法を思考する楽しさがあります。

年長者（中学生〜大人）のレッスン

年齢が上がるにつれ 練習時間をとりにくくなる人が多くなります。1曲が大曲になりますから、課題にする曲数は少なくなります。小さい生徒の場合、指導する側はどうやって興味を持たせるか、自発的に練習する気にさせるかから始まりますが、年長者になるとそれらの点は問題になりません。レッスン中に、「今回はここ」と言うように、気を付けてもらう点を決め、レッスン中に演奏しにくい部分を消化する方法を理解して帰ってもらうようにしてい

ではどちらが好きですか?」「今とさっきのではどちらが手は楽ですか?」等と声掛けをします。良い音色の出し方、手に負担をかけない弾き方に誘導します。「レッスンに来たけれど、今は忙しくて練習できていないからこのぐらいで仕様がなのかな」と生徒が半ばあきらめ気分でレッスンを続けることは避けたいと思います。その人に今出来るレッスン、疲れていても「がんばって来て良かった」と快感を味わっていただく、来て良かったと感じてもらえるレッスンを行いたい。指導する側は、「納得できた。」「すっきりした。」と感じられる、少しずつでも上達できるレッスンを心がけていくべきだと思います。

大人のための教本(図大人1上)

初めてピアノを習う大人の場合、頭での理解は比較的容易にされますが、手が、指が、ついていきません。ですので、まず頭で理解していただきます。そのために、私は「大人のための教本」を作りました。この本には、ピアノを弾くための基本的な知識を書いております。これは、他の教室などでピアノを習ってきたけれども基礎的知識が身に付いていない方にも使用します。

1 ページ目 ト音譜表のハ長調の音階と指番号 音符の長さの比較表

- 2 ページ目 拍打ち リズム練習（小節線の記入）・ハ音から5指で弾く簡単な旋律 スケール
- 3 ページ目 ヘ音譜表のハ長調の音階 音符の休符の種類と比較 休符の書く位置 付点と複付点 はた
- 4 ページ目 拍打ち リズム練習（小節線の記入） ヘ音譜表のハ音から5指で弾く簡単な旋律 スケール
- 5 ページ目 ・・ハ音からの音階 色々な拍子 音や和音の持つ名前
- 6 ページ目 両手のリズム打ち ・・ハ音から5指で弾く簡単な旋律 簡単な伴奏付け
- 7 ページ目 大譜表 音の位置の名前 反進行スケール
- 8 ページ目 伴奏の変化のつけ方 和音の展開形
- 9 ページ目 変化記号と読み方
- 10 ページ目 ピアノの本に良く出てくる楽語
- 11 ページ目 長調 長調の調号 調号の＃♭を書く順
- 12 ページ目 速度記号 繰り返し記号し
- 13 ページ目 移調
- 14 ページ目 短調 短調の調号

このテキストはあらかじめ色々なことを記載するのではなく、その生徒に理解してほしいことをレッスンの中で書き足していく形をとっています。このテキストを使っている間は、1つの曲を5通り位に簡単にアレンジした楽譜を用意します。曲の練習は、「指を動かす」「音符を見て読む」の練習を兼ねて行います。大人で、ピアノを全くされたことのない方の場合、普段見慣れていない音や音符休符を理解することが第1関門です。5指の移動なしで、ドからソの間で収まる曲を使います。右手が4分音符でメロディーを表し、左手は1小節1音のみで、4分の4の曲なら全音符で始め、次の段階で4分音符にする。始めの曲はその生徒が知っている曲にするようにしています。ただし、付点のリズムが含まれているものは避けたほうがいいです。何故なら、リズムにのって弾ける曲だと、つい、うる覚えの勝手なリズムで弾いてしまうからです。折角楽しく始めようとしているときに、ダメ出しが多くなるよりは、始めから右手のメロディーだけでなく左手の伴奏にもトライできるような単純な曲をこちらサイドで用意するのが良いと思います。左手の伴奏は、急に難しいと躊躇しますが、段階を踏むと簡単にできることが多いです。メロディーに対して始めは1小節1音で弾く。次に和音伴奏の時の1音目と5音目のみの重音で弾く。次に和音に

変える。それから、1拍目始めの1音目のみの時の音を弾き、2拍目以降は第3音第5音での重音を弾く。次はそれを分散和音にして弾く。このステップでは、自分の上達度合いを感じ易いので、続けようという気持ちにもなります。テキスト自体は大体7回〜8回のレッスンで終了し、その方のレベルと好みに合ったピアノの本に移っていきます。

提案大人は時間に限りのある方が多いです。ですが、早く弾けるようになりたいと思われています。「やはり自分にはピアノは難しかったかな」と思わせない。生徒に「これなら出来そうだ」と感じてもらうことが大事です。頭で思っていることと手がつながらない方も多いです。同じメロディーで少しずつ伴奏形式を変えたり、リズムを加えたりして、繰り返し学んでいただく方が良いと思います。大人の生徒は、理解はしているけれど単純に体がついてこなかったり、なかなか家でまとまった練習時間が取れない方が多いです。急ぐとかえって変な癖がつきます。変な癖がつかないようにしつつ、理解できるまで、レッスン内に指導するように心がけた方が、結果として進歩が早いと思います。

毎週の確認

前述しましたが 私は生徒によって使う本が違います。そして、本は本ごとに得意とする点が異なります。だからその不足分を補います。それが「毎週の確認」です。確認している項目を以下に挙げます。これらの結果は、毎月生徒全員に渡す手紙に載せます。

音符カード

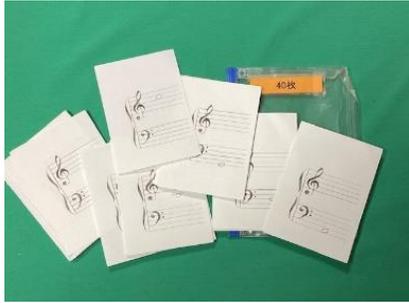
マイカード（個々に持つ） 40枚が1分間に25枚言えると合格にし、教室のカードでのチェックに入ります。教室のカードは

- ・「40枚カード」(図音1) は単音で、40枚で1セットです。
- ・「2音カード」(図音2) はト音記号・ヘ音記号混ぜて30枚で1セットです。
- ・「3音カード」(図音3) はト音記号・ヘ音記号混ぜて25枚で1セットで、AとBがあります。
- ・「5音カード」(図音4) はAがト音譜表のみで33枚・Bがヘ音譜表のみで33枚・Cがト音譜表・ヘ音譜表混ぜて33枚の3段階で用意しています。

難易度はAとBの2段階、またはABCの3段階に分けています。どのカードも1分以内に全て言えば合格です。Aに合格するとBへ、Bに合格するとCに進みます。各カードは合格すれば手紙に名前を載せます。

(図音5) は40枚カードですが、カルタのように厚めの紙で作っています。自分でめくって音を言います。上位5人ぐらいの名前を載せます。

図音1



図音2



図音3



図音4



図5



リズム

導入の段階では、動物・植物・食べ物・乗り物等が記載されたリズム表のリズム叩きをやります。教室でカスタネット
トで叩く練習をしてから、宿題に出して、出来ているか否かの確認をします。リズム表が終了してから週の確認に

参加します。

リズム練習には様々なものを使います。

例えば

「市販の凶鑑」

花・鳥・昆虫・動物の凶鑑を使ってその中に書かれている名前をリズム叩きします。課題として範囲を決めます。どこまでスムーズに叩けたかで、手紙に上位5人くらいの名前を載せます。

「ゲームロボット」(リズム叩きゲームができる玩具)

色々なバージョンのリズムの課題が出ます。もぐら叩き、音あてなどです。これも手紙に上位5人くらい名前を載せます。

オリジナルグッズ

・両手叩き(凶リズム1)は画用紙の右半分は右手用(ピンク)、左半分は左手用(水色)の○を貼ったものです。始めはピアノ譜同様に上下を考えて作ったので4分休符が寝た状態になっています。実際に上下では叩き辛いので右左で叩くようにしています。1. 2. 3. 4を言いながら両手で叩きます。休符は叩かない。2 4

枚を1分で叩いたら合格です。

・歌とリズム譜（図リズム2）は色々な確認に使えます

(1) リズムを叩いて、それが出来れば叩きながら歌を歌います。

(2) 4分音符は膝・8分音符はおなかというように音符や休符によって叩く場所を変えて叩きながら歌う。

・曲に合わせてカスタネットを打とう！（図リズム3）ピアノ曲をカスタネットでいかにピアノで弾いているように叩けるか挑戦するものです。既に知っている簡単な曲を用意すると 踊りながらする生徒も出てきます。

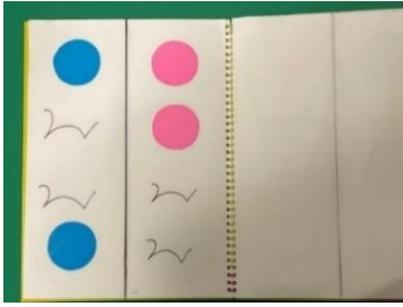
・体でリズム（図リズム4）の使い方は（図リズム2）の(2)と同じですが、テンポを速くすることで難易度が高くなります。

（図リズム5）生徒たちが知っている曲を楽譜無しでリズム叩きをします。音符によって肩、お腹、膝と叩く場所を決めておき、2〜3人で輪になって行います。間違えて違うところを叩くとよく分かります。1回叩いてから、楽譜を見てもう1度叩きます。お母さんが教室にいる場合は、一緒にやっていたきます。

（図リズム6）前半はウッドブロックを使い、後半は手と足を使うリズム練習カードです。前半のカードには単音

を記載しており、音符のときはウッドブロックの右・休符のときは左を叩きます。後半のカードは上下にリズムを書いており、上の段は手で、下の段は足を使ってリズムを叩きます。

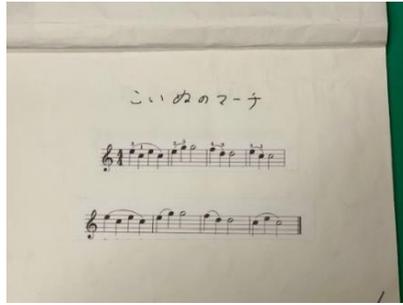
図リズム1



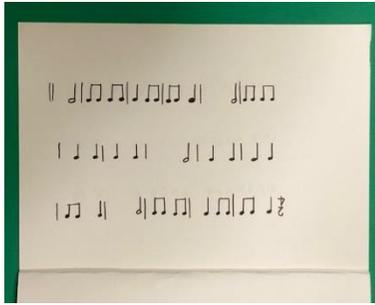
図リズム2



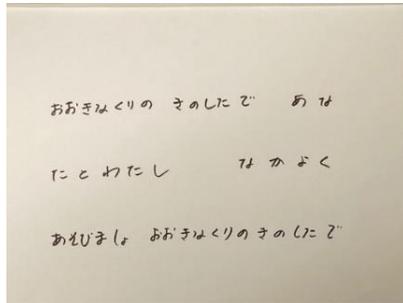
図リズム3



図リズム4



図リズム5



提案

リズムの練習は大部分の生徒が楽しみにしています。音が鳴るものは全て楽器にできます。ですから、本格的な楽器でなくても、大きさの違う缶やヤクルトの容器にボタンや砂利、おはじき、ストローを細かく切ったものを入れたものも、楽器になります。私の教室では年に2回、ワークをしなくて良い日を設け、そのときに、生徒と一緒にこういった楽器を作っています。

指番号

導入の段階の「ゆびノート」で手の形、右左の指番号の確認をしてからは、これから紹介するオリジナルグッズを使います。

(図1)と(図2)は鍵盤自体に番号が打ってあるカードです。3の指で番号順に弾きます。

簡単バージョン(図指1)と少し難しいバージョン(図指2)を作っています。

若い生徒の場合はこれをする前に指人形(図指3)を指をはめて人形を歩かせる練習をします。好きな人形を選らんで、2と3の指を丸穴に入れて、指を人形の足に見立てて机の

上を歩きます。上手に歩かせるようになったらカードに参加します。必然的に「ゆびノート」で練習した

「グー・パー」の形になります。

(図指4)はカードにランダムに1〜5の数字が書いてあります。1回目はカードに書いてある1を右手の時は「ド」に左の時は5を「ド」に置くことを決めて1分間に鍵盤上で何枚弾けるかをします。「53412」のカードであれば、右手で弾くと「ソミファドレ」、左手で弾くと「ドミレソファ」となります。次の回ときはソに右手の1左手の5をいうように変えていきます。1分間に何枚弾けるかをします。



図指 1



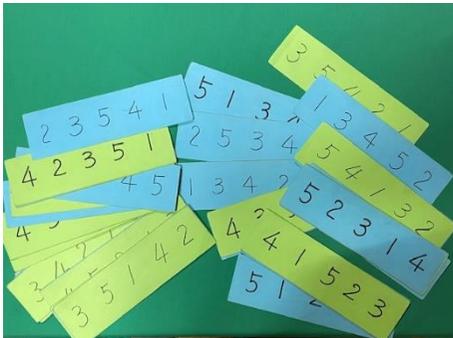
図指 2



図指 3



図指 4



指の形・指のおろし方の確認

(図指5) は、指の形の確認用グッズです。高さを変えるためにコルクの板を3つ重ねています。黒鍵と白鍵を弾く時、弾く度に手の高さが安定しない生徒がいますが、指の付け根から降ろすようにして弾くと鍵盤の高さが変わっても手の高さを一定に保ったまま弾けるのでその練習です。オクターブ練習や、オクターブのトレモロ練習にも使える幅にしています。

(図指6) のグッズはピアノを弾くときと同じような形で突起の上に指を置かせ

その時に指が突起に吸い付くような状態で置けるか指と指の間を広げる意

識を持てるか確認する目的で使います。小さい生徒は2と3の指、小学生

は234の指、中学生以上は2345の指で練習します。

図指6



図指7



図指8



(図指5)



(図指7) ケミカルスポイトの上部ジャバラの部分を使います。スポイトを3分の1ほどの長さで切り5つ束ねて

テープで止めたものです。てっぺんに指先を当て、どこが当たっているのかを認識させるのに使います。

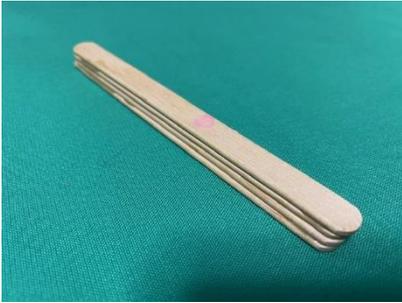
(図指8) は鍵盤の深さを見せるグッズです。鍵盤と同じ厚さのコルクをアイスの棒で挟んであります。1センチの鍵盤を底までタッチする感覚を覚えてもらいます。指はアイスの棒を押えるのでなく、素早く下のアイスの棒に当たるように下ろしてもらいます。

(図指9) は指の第1節がしっかり立てられているか確認するためのグッズです。輪ゴムを突起のくびれた部分に引っ掛け、さらにその輪ゴムを指の第1節に引っ掛けて、引っ張っぱりあいを行います。まっすぐ引っ張っぱらなると輪ゴムは外れてしまいます。指を置くところには黒い「セルスポンジ」(防音材・クッション材として使われる素材です。)を貼っています。

図指9



図指10



図指11



(図指10)は同音打鍵の練習に使うグッズです。アイス棒を4枚張り合わせて作った物です。打鍵は1点で指の進みは縦1線に動かします。アイスの棒の上で行うと、指の動きだけに集中できます。

(図指11)手を丸くした状態で乗せられる高さの板を直角につけ、板の上ののせて指を動かします。付け根から下ろさざるを得ないようにしています。指の長さの違いに対応するため、板を1枚つけています。指の動きが確認できます。

(図指12)



(図指13)



(図指14)



(図指12) コルク板で作った鍵盤です。手の形、指の形を確認するときに使います。机等、木でできた物の上で

「指をトンと下ろして」と指示するとき、若い生徒は指がまだ柔らかく、負担が大きいため、コルク製の鍵盤を使うことで負担を減らしました。ちなみに、鍵盤に吸い付くように指を下ろすの練習には、先ほどのセルスポンジを使います。

(図指13)は、タッチの練習用のグッズです。(映像を載せました)黒い厚みのあるウッディボードに鍵盤の高さを出すための板を2枚平行に貼り、4mmの厚さの板の白鍵を下から7mmの高さで作りのせています。その上に高さを足して黒鍵をのせています。これは、近現代の曲で、マルカートで速度のある曲を演奏するときに使います。音は自分の下ろした指のタッチ音が聞こえます。

(図指14)教室では「タッチ」と呼んでいるボードです。鍵盤の幅で線を引いた中に「音の色」でも使用している「色プラ」を指が置きやすいように少し窪ませて1〜24の番号を書き、真ん中の判は最後にタッチするようにしています。色はランダムに貼り付けています。1分以内に1〜24と判まで順にタッチできて合格です。何秒でできるかも競います。手の形、指の形が正しいほど早くできます。

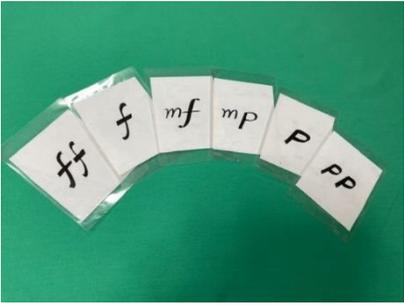
強弱記号 (図知識1)

カードを渡して、弱い記号から強い記号へと並べてもらいます。

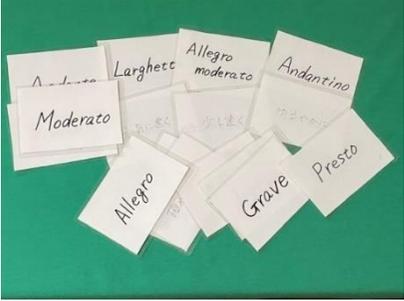
速度記号 (図知識2) (図知識3)

速度記号の確認です。イタリア語のカードは、カードを引いて読みと意味を答えます。メトロノームの絵の

図知識1



図知識2



図知識3



図知識4



図知識5



1番上に4分音符 \parallel 40を置き、1番下に4分音符 \parallel 240を置きます。



その間に速度記号を置いていってもらいます。読み方、意味の理解をし、「知ってることノート」にも書き加えていきます。

知識チェックが終了したものをから順に（図知識4）（図知識5）の確認を月1回で行います。音符から始め、合格したら休符、次に強弱、速度と続きます。

初見練習

マイカード40枚に合格すれば参加します。バーナム・バステイン・トンプソンなどから抜粋した曲を100曲用意し、毎週初見で弾く練習をします。1曲を3回以内にミスすることなく弾ければ合格です。

オリジナルグッズとしては

（図初見1）ドレミファソの並びのカードを作り、それぞれのカードに異なるアクセント・スラー・スタッカー

ト・リズムを書き込みます。カードを見た時に、その違いを読み取る練習に使います。

（図初見2）5指の移動無しで弾ける、調（ハ長調・ト長調・ヘ長調・ニ長調・変ロ長調）の練習です。

これはどれだけ早く楽譜を読み取って弾くかという段階になると、先生がカードを出すスピードも問題になってきます。そこで、カードを1枚ずつ写真に撮り、タブレットに取り込み、それを譜面台に乗せて、写真



図初見5



図初見1



図初見6



図初見2



図初見7



図初見3



図初見8



図初見4



をスクロールしていく方法をとっています。順次この方法に変更していっています。

(図初見3) 両手奏の初見練習で、左手は和音にしてあります。各小節を縦に見る練習です。

(図初見4) 両手奏の初見練習で、左手は単旋律で書いています。

(図初見5) は小学低学年の練習で使います。単旋律ですが、音符数・リズム・小節を徐々に増やし様子を見ながら進めるようにしています。

(図初見6) は、右手でメロディーを弾き、左手で膝でリズムをとるものです。

(図初見7) は、リズムを正確にとることと、臨時記号に注意することの練習です。調号が書かれていたら、曲全体で音の高さに関係なくシャープ・フラットが付くので注意します。チェックで使用する物は手書きと楽譜作成ソフトのフィナーレで作ったものがあります。生徒のレベルによって曲の使い分けを行い、楽譜を見たらその場で弾ける喜びを味わってもらえるように指導します。「ドレミファソ」の並びだけで少しずつ変えてある楽譜↓一目で視線に入れる楽譜↓同じ音の並びで少しずつ変化のある楽譜↓左和音を入れる↓左リズムを叩くのをに入れる↓左単音打ちからメロディーを加えるに移る↓メロディーを弾いて伴奏を考えて弾きま

す。伴奏付けが I・IV・V・Vの7・II位ですが入れられるようになります。

音程

これは単純に鍵盤の数ですが苦戦する生徒もいます。分からなくなったら、ドからだ完全1度・長2度・長3度完全4度・完全5度・長6度・長7度・完全8度なので、「その鍵盤の数、黒鍵白鍵を数えて、その数との違いを見てください」と言います。

(図音程1)は、音程用のグッズとして作った音程尺度さしです。半音ずつで止めて鍵盤の上に合わせられるようにしています。例えばドからミにさしを合わせると長3度になり、レからファにさしを合わせると短3度と表示されます。

(図音程2)は、音程で言うと「完全1度と減2度の響きは同じ」といったことを書いた板です。度数は白鍵の数で決まり、「長・短・増・減・完全・重増・重減」は鍵盤の数で決まることを表したものです。

(図音程3)は、同じ度数のものを書いたものです。

(図音程4)は、度数チェックカードです。

調

図音程 1



図音程 2



図音程 3

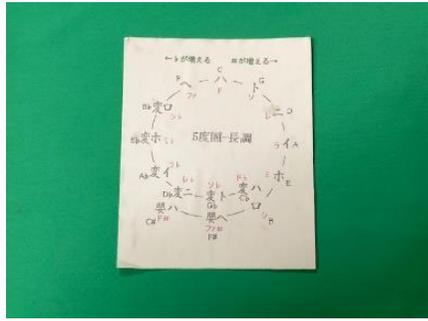


図音程 4

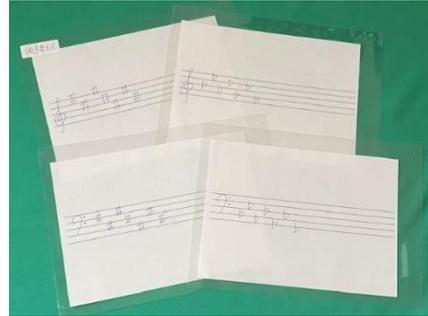


小学校4年生以上になると、「ジュニアクラス楽典問題集」をするのですが、その中の項目に「音階」が出て来た段階で、月に1度か2度、楽典をしないで音階を書く練習の日を設けています。「何調」と課題を出し（まずシャープ系ト長調・ニ長調と順に行います。）「全全半全全全半」で臨時記号でシャープやフラットを書き込んでもらい、調号に何が付くかを考えてもらいます。そして、長調と短調（自然・和声・旋律）を書いていきます。理論の説明はできるのですが、シャープ系の調の場合、シャープは「ファドソレラミシ」の順に付くこと、フラット系は「シミラレソドファ」で付くことを知っていた方が便利なので、別に教えます。

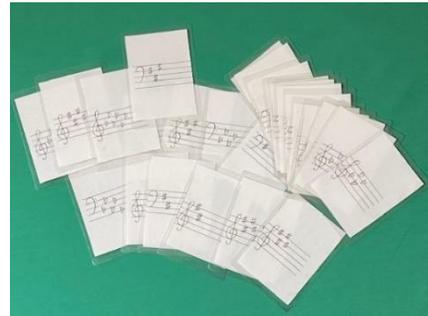
図調 1



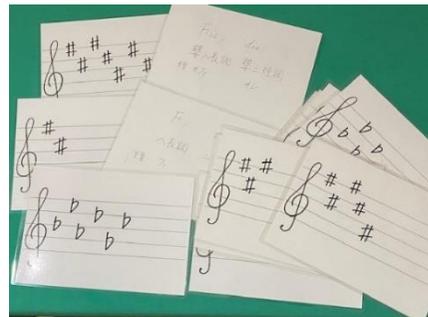
図調 2



図調 3



図調 4



(図調 1) 5度圏表の説明をします。

(図調 2) シャープ・フラットの調号を書く時に見て書いてもらうものです。線に書く記号、間に書く記号、それぞれ正確に書かなければ調号として読み取れないことを指導します。ト音譜表に書けても、ヘ音譜表になると高さを間違えて書く生徒がいますから、必ず練習が必要です。

(図調 3) 生徒自身が、何調か答えられるか自分で確かめるチェックカードです。

(図調 4) 調号カードの裏に、何調か、日本語とドイツ語、主音を書いています。例えばシャープ1つだと

「ト長調・G・ソ・ホ短調・e・ミ」に記載しています。

和音

和音の種類、長和音・短3和音・増3和音・減3和音の説明をします。これも小学4年生以上です。先程の調のところで書いた音階の上に和音を書いていってもらいます。そしてそれぞれに「長和音・短3和音・増3和音・減3和音」等、名前も書いてもらいます。「長和音・短3和音・増3和音・減3和音」の響きも聴いてもらいます。和音が全調書ければ、次は何調に含まれるかを見ます。例えばドミソは長3和音の場合、「長調の1, 4, 5、短調の5, 6」の和音に含まれることから調を考えてもらいます。次に属7の和音を作ります。展開を学ぶと、伴奏を弾く時、展開形を使って弾けるので、初見練習で単旋律を弾いた後で、「伴奏付けしてみようか」という声掛けが出来るようになります。メロディーの邪魔をしない伴奏に一步近づけます。

(図和音1) 基本1・IV・Vの和音の基本形・第1転回形・第2転回形を記載したものです。

(図和音2) 色で基本形・第1転回形・第2転回形を表した表です。

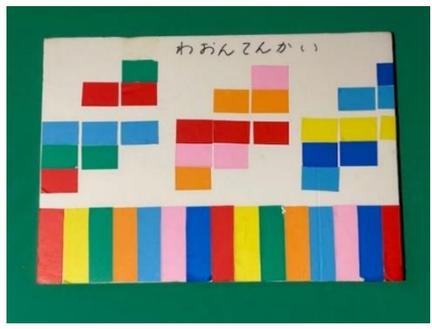
(図和音3) 度数のグッズと同じで、和音の種類(長和音・短3和音・増3和音・減3和音)を図るさしです。

長和音は長3度と短3度の組み合わせ、短3和音は短3度と長3度の組み合わせ、増3和音は長3度と長3度の組合せ、減3和音は短3度と短3度の組合せです。

図和音1



図和音2



図和音3



図和音4



(図和音4) 基本形の和音が書いてあります。長調若しくは短調の1と考えて何調かを答えるカードです。

(図和音5) はこの和音は何調に含まれるか考えるためのものです。ドミソの長3和音を例に挙げたとき、ハ長調

のIであり、ト長調のIVであり、ヘ長調のVです。また、ヘ短調のvであり、ホ短調のviになります。同じよ

うに課題の和音を出し、短3和音・増3和音・減3和音について考えてもらいます。

(図和音6) は (図和音5) で学んだことが分かっているか確認するためのカードです。

(図和音7) コードネームを書いています。

(図和音8) 和音を見て直ぐに弾く練習をするためのカードです。3つの音のうち2つに色を塗り強張しています。

和音3つのうちの2つ、重音を読むことで和音の読み取りが早くできる練習です。例えば「ド」を含む和音は、「ドミソ・ファラド・ラドミ」です。だから、「ド」が含まれていればこの3つの和音のいずれかになります。これに反応できるようになるのは慣れですが、見方を指導します。

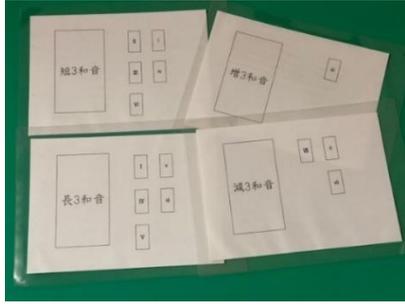
(図和音9) 鍵盤カードに印をつけ、ピアノを弾いて何調の何の和音かを考えるのに使います。伴奏付けをする時、和音を理解していると進みやすくなります。ただ、そのため、詳しく教えられるのは中学生以上になります。和音を弾く↓根音に音を重ねると音の響きがどう変わるかを聴く↓コードネームを知る↓何和音か見る↓和音の種類によって異なる響きを聴く↓何調に含まれる和音なのかを考える。

鍵盤

私は「抜き打ちチェック」に鍵盤も使います。どの鍵盤もピアノの鍵盤幅を守り作っています。



(図和音9)



(図和音5)



(図鍵盤1)



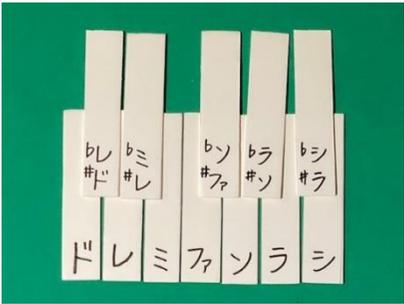
(図和音6)



(図鍵盤2)



(図和音7)



(図鍵盤3)



(図和音8)

(図鍵盤1) は幼児・幼稚園児に鍵盤3枚を横並びに置いてもらい、各鍵盤の「ドはどれかな」と聞くのに使います。

(図鍵盤2) 2種類のドレミの場所確認用です。白鍵3つのものと、4つのものを用意しています。生徒に「つながりてみて」と言います。もう1つは白鍵だけが書いてあるシートに黒鍵を置いていけるか確認するものです。

(図鍵盤3) は白鍵に「ドレミファソラシ」を書いたものと、黒鍵を組み合わせて鍵盤を作ってもらうためのものです。

テトラコード

(図鍵盤4)

テトラコードは全・全・半からできていてそれを組み合わせることで長調がどのようなように作られているか説明をします。その後、理解できたかどうか確認するために並べてもらいます。

聴音



図鍵盤4

まず、ト音記号、音符（全音符・2分音符・4分音符・8分音符）休符（全休符・2分休符・4分休符・8分休符）を書く練習をし、次に、私が声を出してその指示でト音記号・4分の2拍子を書いてもらいます。このとき、ト音記号が正確に書けなければ、またト音記号の練習に戻ります。同じように拍子記号はあえて4分の2から始めます。4分の2から始める理由1は、拍子記号の拍を数える基準の音符が下にきて、上は1小節に入る音符の数であることが理解できているかを見るのに4分の4では理解できているか判断ができないからです。4分の2が書けなければ、この意味は4分音符が2つで2拍分あるということの説明して、4分の3、4分の4、8分の6も書く練習をします。これが1回できっちり書けるまでは聴音には入りません。書けるようになったら、私が言った4小節分の音を書きとる練習をします。4分の2から始める理由2は、4分の2が書けて、次の音を書く段階に進めたとき、音符の数が、4小節でも4分音符だけで書かせるなら8個です。始めは4分音符のみで、棒の向きが正しく書けるか、第3線の音より上の音は棒を下向きに書けるか、小節線や終止線を書けるか確認します。次は4分休符、2分音符を加えていきます。きっちり書けるようになるまで、音を変えて同じことをします。次は4分の3拍子で行い、付点4分音符・8分音符・8分休符も加えます。私が言った音を書いてもらい、リズムはゆっくり手を叩いて、タン・ウンを言って書き取ってもらいます。そこまでできるようになったら聴音に入ります。

次は音をとる練習です。始めは4小節の曲の中に空欄の箇所をいくつか作り、そこに音符や休符を書き込んでもらいます。出来たという確認が出来るまで同じレベルの曲を数曲行い、本来の聴音の仕方に入ります。つまり、何調、何分の何拍子、何小節の曲かの課題を言い、8小節を通して1度弾き、前半4小節を3回弾く、8小節を通して弾く、後半4小節を3回弾く、8小節を通して弾きます。どの程度書けたかを見て、次回の聴音のレベルを決めます。

覚えるもののチェック

音符の名前・休符の名前・強弱の読み方と意味・速度記号をきちんと覚えておくかチェックします。これは、知っていることノートに綴り・読み・意味の書き込みが出来多段階でのチェックです。正解しなければノートに書いて覚えさせます。合格できるまで、毎月チェックします。

カードで行うチェック

(図確認1) (図確認2) は生徒が自習用に教室内で覚えるのに使ってよいカードです。

(図確認3) は5線ノートにきっちり拍子記号が書けるかどうか確認するためのものです。一緒に、音符の数や強

図確認1



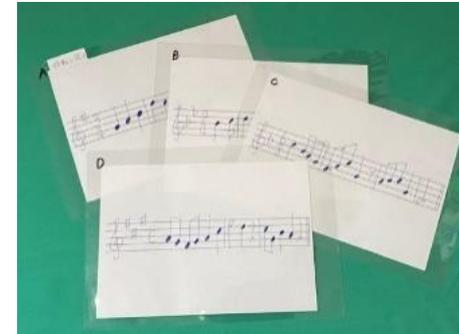
図確認2



図確認3



図確認4



拍・弱拍の確認もします。

(図確認4) 拍子の書き換え(4分の3を8分の6に書き換えるなど)を行います。移調の確認にも使います。

(図確認5) 自主参加制のカードです。ケースの中には100枚のカードが入れてあります。裏表に問題が書かれ

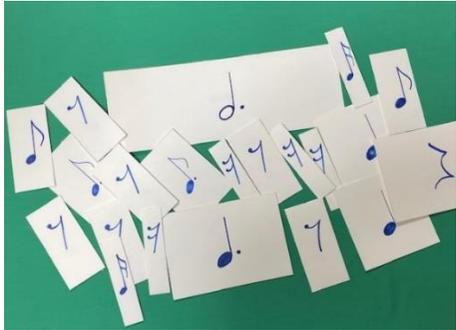
ていますので、全部で200問あります。参加する生徒には200マスシートを渡し、レッスン1回に1枚

引いて、自分が答えられる方を選んで解答します。正解なら判子を押します。既に判子を押されたのを選ん

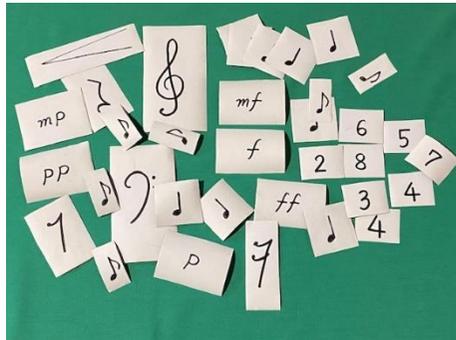
図確認5



図確認6



図確認7



図確認8



だ場合、裏の質問に答えます。裏表の両方が既に答えられている場合、別のカードを引いて答えます。

チェックは色々用意していて、私が「まだ理解できていないかな？」と思う生徒に対しては、仮に生徒自身が「前にもう勉強した」と言っても、パネルシアター、マグネット、グルーガンで作ったグッズなどを使い、方法を変えて何度でもチェックを行います。長く間をあけると、全く忘れていている事柄もあるので、その場合も生徒の知識の確認に使用します。

(図確認6) はパネルシアター対応です。

(図確認7) (図確認8) マグネットです。磁石シートに直接書きます。

(図確認9) (図確認10) グルーパーンで作っています。透明ファイルに黒マジックで5線を書いたものに音符や記号を載せていきます。(図確認9)の方は間に白紙を挟んでいます。5線のどこに記号や音符を置くのかの確認です。

スケールの確認

(図音階1) 1オクターブ上行のみ↓指番号の決まりを書いています。

(図音階2) は、まず、1オクターブ上行を弾きます

(図音階3) は「上行下行指変えは同じ音」ということを1オクターブ上行下行を弾くことで確認させるものです。1オクターブ上行下行と和音弾けると2オクターブを行います。

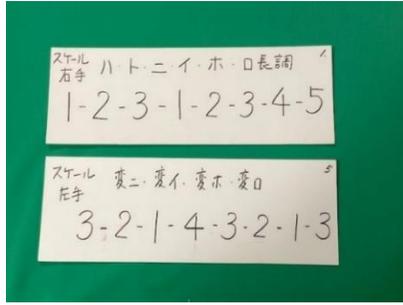


図確認10



図確認9

図音階 1



図音階 2



図音階 3



図音名 1



図音名 2



音名の確認

小学5年生以上に対してチェックの1つとして使います。裏表どちらからでもチェックが可能です。

(図音名1) 表に日本音名裏に階名を書いたカードです。

(図音名2) 表にドイツ音名と裏に階名を書いたカードです

小学3年生までのソルフエージュと歌

ソルフェージュは「歌うソルフェージュ1〜3」を使います。年少から教室に通っている生徒は大概が小学校3年生終わり頃には3巻目を勉強しています。この本は、始めは、歌いながらリズムを打つページが続きます。私が誘導で声を出して次に進みますが、音を読む段階になって「歌いたくない」と言う生徒には読む代わりにピアノを弾かせます。3巻に入ると長手打ちのリズムに入るのでかなり高度です。両手打ちは右手が「ソ」左手が「ド」というように音を決めてピアノで行います。小学3年生でソルフェージュを終えます。声変わりの時期に入る生徒たちもいますから、声を出させるならちゃんと発声をしたいのですが、その時間が取れないからです。また、ジュニアクラス楽典が今までのワークより時間がかかるという理由もあります。

興味を持たせる

生徒は「先生今度は何作ったん?」「どうやって作るん?」と、目をキラキラさせて言います。

生徒と私のコミュニケーションです。生徒が何かできない時、頭打ちしている時、視線を変え、固まっている思考をほぐすにはどうすれば良いかを考えて出来るのがオリジナルグッズです。次のグッズは自力では作れず「東急ハズ」の木工部に発注しました。

(図教具1) は手首脱力器です。板に半円を取り付けたもので円の中に手を入れてボールの両側に当たるように振ります。手首の力を抜くために使います。両側に当たると意識すると、手首の力は抜けます。

(図教具2) は上腕脱力器です。ピアノを弾く時、手首の力が抜けても肘に力を入れる生徒がいます。自然体で腕を上板に乗せて肘をバウンドさせ上腕から肘にかけての力を抜く練習用です。

図教具1



図教具2



私自身が注意していること

レッスンをするとき気を付けなければいけないことは、生徒は年齢によって集中できる時間が異なるということです。リトミック生や年少は3分間集中出来るようになるように心がけます。同じことに時間を拘束しない。こちらの懐に入っている間にレッスンを終わられるようにします。こちらが欲を出して多くを分からせようとしてはいけない。そして、幼稚園生の中に「忘れたことは調べる」癖をつけます。この頃の分からないことは音符や休符の名前・長さ(数字や言葉)強弱記号に関することなので、新しく出て来た時に「私の知ってることノート」に必ず書きます。まだ文字が書けない生徒も、読むことができるようであれば、お母さんなり私なりが書きます。小学生になるとこれに加えて簡単な辞書の使い方を説明し使えるようにします。徐々にですが、内容に応じて辞書で調べられるようになります。また、調べるであろうことで辞書では分かりにくいこと、例えば作曲家や楽器などは、冊子を作って生徒が調べやすいように用意しておく。「やりなさい」と声掛けをするより、生徒が自分で出来るように用意をしておいてあげることが大事だと思います。「その棚のピンクのファイルを見てごらん。」などと声掛けし、自分で調べることのできるファイルがあることを理解してもらいます。徐々に自分から探すようになります。

生徒たちはピアノを中心に生活しているのではないので、楽典の知識なども直ぐに忘れず。学業のように試験が

あつたり成績に反映されたりするものではないので、教える側が理解できているか否かのチェックをする必要があります。それが先に述べた「音符」「休符」「強弱」「速度」「表現」のチェックです。だらだらやるのではなく、レッスンの前後どちらかに1分だけします。できなかったときに書いて覚えるように指導しますが、それも3つくらいにし、負担のないようにします。あくまで、罰則ではなく、覚えることが目的ですから、覚えられる範囲にとどめます。本人が意識しないうちに覚えられていることが大切なことだと思います。また、毎月生徒には手紙を渡すのですが、チェックや音読み、リズム・聴音（年齢別）など、その月に行った課題の合格者や成績の良かった人の名前を載せます。励みになるようです。

生徒たちはそれぞれに何かを楽しみにしていたり得意としていたりします。出来ることで自信につながります。一番善い点は もしその週、病気で練習が出来ていなくても用事が多く練習がままならなくても、教室に来れば何か上達できると思えることです。だからと言って、練習をして来なくなるという訳ではなく、むしろ練習してこないということは少なくなります。何故なら、音・指番号・リズム・和音といったプラスになる練習を、少しずつですがしているのです、その効果により宿題がやり易くなっていくからです。生徒達はそれぞれの確認を順にするので月1度しかしませんし、私のノートには成績を記録しておきますが生徒個人のノートには何も書きません。でも、前

回は何枚だったとかどこまでできたかを覚えていきます。生徒達が互いに互いの得意とすることを認め、悔しがったり喜んだり競い合ったりしています。自然な形で、誰かにほんの少しでも「凄い！」と思われることは自信につながります。それにより自発的な気持ちが膨らんでいくのもうれしい事です。

足台

レッスンを始めて生徒に一番よく言う言葉。それは「足をしっかりと下に着いて」です。足を下に置くのではなく、地面を踏んでいる位の気持ちで着いてほしいのです。それでない、爪先立ちとか空中浮遊で弾いている状態になります。小さい方は当然、足が着きません。足台が必要になります。重量感のあるものでないと弾いている最中にガタガタしてしまいます。足台はレッスンで必ず使用しますが、レッスンの時だけでなく家でも使うようお願いしています。専用の足台を用意してもらうのが最良なのですが、使わなくなった厚めの本を重ね、ガムテープなどで固定したものや、小さい椅子を使ったりしてもらいます。座る位置も大切だと伝えます。小さい人ほど、高音だけを使ったり、低い音だけを使ったりする場合があります。そんな時、座る場所を間違えると体を歪めた状態で弾くことになります。使う音階の真ん中に体の中心が来るように、又はメロディーの側に心持ち寄って座ってもらいます。

ピアノと椅子の間隔も腕が滑らかに曲線で鍵盤に手が置ける位置がベストです。そうするとおのずと椅子の高さも決まってきます。軽くグーをして鍵盤の上に手首まで乗せ、体の方に引き寄せ、手だけのるようにし、軽く手を開きます。これがピアノを弾く時の大切な姿勢です。まず形をきっちりさせると学びやすくなります。色々な演奏スタイルがあります。でもそれは、多くのことを習得して行く段階で自分の弾きやすいスタイルが出来てからの事です。結果的に変わるのはいいと思いますが「何事も基本をしっかり身に付けてからね」と言います。

提案 足台は高価ですが使うのは小学生の間だけです。使わなくなると邪魔なものでしかないので、以前購入された生徒の保護者に貸してくれるようお願いします。皆さん快く貸してくださいませ。小学生の生徒が家で使う間は貸していただき、購入額の4分の1程のお礼をお渡しします。3回目くらいで皆さんお礼を辞退されることが多いです。

自動演奏ピアノ

私は自動演奏付きピアノと電子ピアノを教室に置いています。サイレント付き自動演奏ピアノを置いておられる方は少ないと思いますので、その利点だけ少しお話しします。

・録音はタッチも記録するので、キーの下ろし方がゆっくりとか浅いかいったことまで直接目で見て確認できません。

・演奏を録音し、右手左手の音量を聴きます。初心者ではどういうふうに弾けているかなかなか聴けないので、

カウントをとって片手を録音し、後でもう片方を録音します。片手だと左手を滑らかに弾くことも守れます。

・両手録音し片手だけが聴けるスプリット機能（録音する前に例えば右手左手共に録音状態にし、ロをスプリット機能を使うためにキーを鳴らして両手録音します。聴くときに右手を聴くにするとか低い音だけが鳴ります。）で、どう弾いているか聴いてみます。両手で弾くと互いが互いをかばい両手で同時になる音を作ります。

・メロディーが生かしているのか、伴奏はメロディーを聴いて弾いているのかといった点を聴きます。

・レッスンで弾きにくい箇所は右ならオクターブ上、左ならオクターブ下でカウントを入れて弾いて録音します。

生徒は録音再生しながら自分が弾く位置のキーで弾きます。両脇で右左の音のキーが下がりますから、鍵盤位置も音色も確認できます。自主練習をするときに使います。

・連弾練習に使うときはカウントを入れて第2パートを録音します。重ね録音で第1パートを入れます。聴くときに片方のパートを消せますので、1人でも連弾練習ができます。連弾はピアノ練習にとっても効果のある事だ

といたしますし、できる状態を提供したいと思いますが、時間に追われている生徒が多く、生徒同士で連弾をしたくても合わせる時間がなかなか取れないのが現状です。そのようなときに、互いのパートを録音して、教室内で練習し、相手に要望を伝えられます。生徒が初歩の段階では親子連弾を薦めますが、親子の場合、特にお父さんは子供の進度についてこられなくなります。教室へ来ていただいて、いつでも自主練習できるようにフロッピー又はUSBに記憶させてキーの下りる場所を目で確認していただく、音やリズムを覚えていただくのに使ってくださいます。

・販売されている曲のデータの中にはオーケストラの演奏がついているものがあります。イメージが広がり、生徒が小さい場合両手で合わせるのは難しいですが、練習途中の片手でも楽しく弾けます。共に曲を創るということは、子供のピアノレッスンに対する子供の見方を良い方向に向かわせます。人間同士の連弾は、呼吸や強弱、曲作りを考える良い練習になります。また、データとの連弾は共に創り出してゆく音楽にはなりません、テンポ・リズムを正確に弾いたり、曲のイメージをよく理解するのに効果があります。データは待ってくれません。何度弾いても同じ状態が創れるようになる経験をするのも大切なことです。メトロノームの音を聴く余裕のない生徒でも、データの曲という音楽に合わせてみると、テンポを聴き取れたりします。

電子ピアノ

教室ではローランドを使っています。レッスンに来た時に「練習が足りていない」と感じている生徒は、電源を入れ、ヘッドフォンをし、自発的に練習しています。電子ピアノの良い点はメトロノームを鳴らしながら弾けるということです。オーソドックスなメトロノームも、携帯アプリのメトロノームも鳴らしていても弾くのに懸命になって合わせづらい生徒が多くいます。電子ピアノの場合ヘッドフォンを通して自分の出している音と同時に拍が聞こえるので、背中を叩いて拍を伝えるのと同じくらい分かり易いようです。

もう一つの利点は、色々な音色で演奏できることです。バロックの曲を弾き始めた生徒には、チェンバロの音色で弾かせます。曲のイメージを持たせる役割をしてくれます。

ピアノ選び

ピアノを始める方は、「ピアノが家にある方」「キーボードがある方」「電子ピアノがある方」「ピアノがない方」に分かれます。皆さんにはそれぞれの鍵盤楽器の違いをお話しします。キーボードはキーに触れると音が鳴ります。電子ピアノは「このピアノはグランドピアノタッチ」とかいった歌い文句がありますが、教室のピアノのキーを触ってもらい、全く違うことを体感してもらいます。教室には、電子ピアノ、アップライトピアノ、

コンサートグランドピアノが置いてありますので、弾き比べ（と言っても1音を指で下ろしていただくだけなのですが）、皆さんそれだけで違いを理解されます。私は、いい音色を出せる生徒を育てたいのであくまで教室ではタッチを教えたいということを伝えます。住宅事情で、アコースティックピアノを家に置けない方もおられます。大きくなってピアノを楽しめるようになると、自宅で電子ピアノで練習している生徒は早めに教室に来て、アップライトピアノで練習をしています。練習をしている生徒の姿を見て、他の生徒も、「教室へ来たらピアノを弾くものだ」という認識になっていきます。アップライトピアノを置ける状態の方が、「実家に古いピアノがあります」と言われた場合、調律師にピアノの状態を見ていただくことを勧めます。ピアノを移動させてから使えない状態だったり、中をかなり入れ替えなければならぬようでしたら高くついてしまいます。新たに購入を考えておられる方には、中古のピアノでも調律師に見てもらえば十分良いものが購入できることを伝えます。新品のピアノの購入を考えておられる場合、カタログで選ばれるのではなく、楽器店が開く展示会に行つて、実際に色々なピアノに触れさせてもらうことを勧めます。調律師はこちら側の希望する音色、キーの重さ等の調整をしてくれます。小さい子供の場合、指がしっかりしていない分、キーに重さのない電子ピアノの方が音は出しやすいですが、それに慣れるとピアノを弾いたときに芯のある音が出せなくなります。ア

アップライトピアノで練習している生徒はそのキーの重さになれているので、押さえつけにはいきません。「いずれアップライトピアノを」と考えられているかたには、鍵盤の重さなどは調律師が調整してくれることも伝えます。

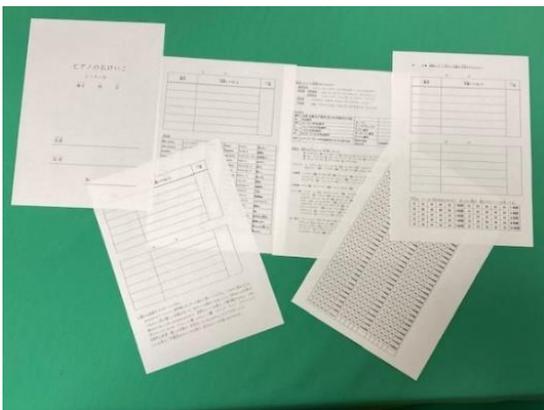
スマートフォンを使う

以前は、ビデオカメラを設置して録画し、その場で生徒に本人の演奏を見せていましたが、今はスマートフォンがそれを簡単にしてくれています。レッスン時にお母さんが一緒に来られている場合、宿題の演奏の仕方に不安を持たれば、私が弾くのを録画していただきます。また、生徒の弾き方で直してほしい箇所について、してほしくない弾き方としてきてほしい弾き方の両方を録画します。これは、保護者が一緒に来られていない場合も携帯に送ります。レッスン中でも、録画すれば良い音なのかどうかすぐに確認出来ます。鍵盤と指が映る状態で録画すると、指の下ろし方、どのように弾いているかも直ぐに生徒に見せることができます。必ず、良い状態との違いを把握させます。生徒が帰宅後分からない箇所が出てきた場合は、その箇所を写メで送ってもらえればすぐに答えが送れます。

おけいこノート 図おけいこノート

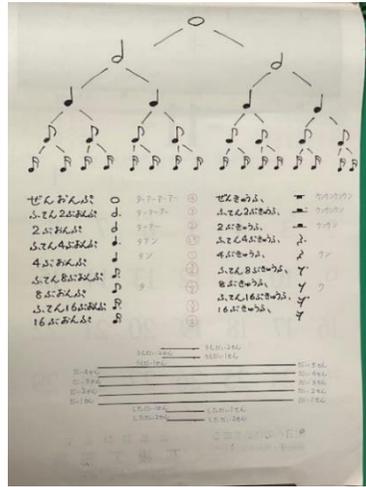
このノートの表紙も白紙です。生徒たちが色々絵を描いたりシールを貼ったりして自分のおけいこノートにしています。内容は3か月11回レッスンの形で作ってあります。また、予備のレッスン日の欄もあります。家で練習した時間を塗りつぶしていく欄を、10分単位で10時間分用意しています。最後のページにも100時間の欄があります。強制はしませんから、塗る生徒も、塗らない生徒もいます。12ヶ月で120時間と後ろのページの100時間で合わせて220時間、塗りつぶせれば、教室に用意しておいてあるご褒美箱から好きなおもちゃを1つもらえます。これは、ピアノの本やワークブックが終了した時でももらえます。縁日で売られているような他愛もないおもちゃですが、生徒たちは楽しみにしてくれています。他には、覚えてほしい楽語や作曲家も載せています。

宿題を書く欄は6曲分です。各月には私からの一言も添えています。生徒への思いを込めた連絡ノートです。

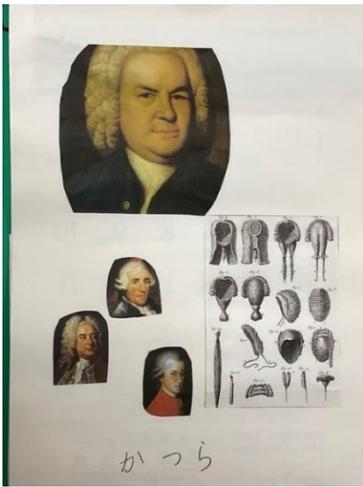




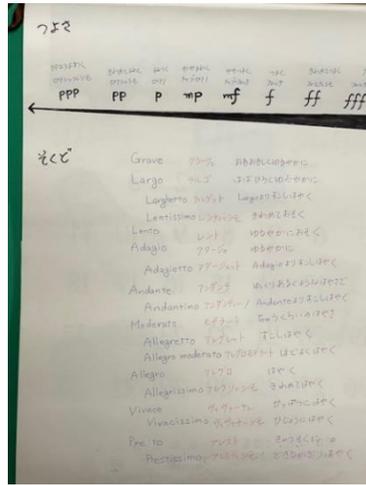
図カレ4



図カレ1



図カレ5



図カレ2



図カレ6



図カレ3



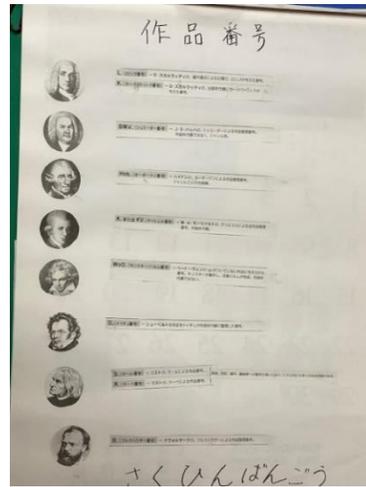
図カレ10

バロック Baroque	古典派 Classical	ロマン派 Romantic	近・現代 Modern/Contemporary	邦人 Japanese
1600-1750 バロック音楽の始まりは、1600年のオペラ誕生から始まる。バロック音楽は、17世紀後半から18世紀前半にかけての音楽様式。	1750-1825 古典派音楽は、18世紀後半から19世紀前半にかけての音楽様式。代表的な作曲家としてモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトが挙げられる。	1825-1900 ロマン派音楽は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての音楽様式。感情豊かで個性豊かな音楽が特徴。	1900-1950 近・現代音楽は、20世紀から現在までの音楽様式。多様なスタイルが存在する。	1900-1950 邦人作曲家として、西條照太郎、岡譲二、武満徹、久石譲などが挙げられる。

図カレ7



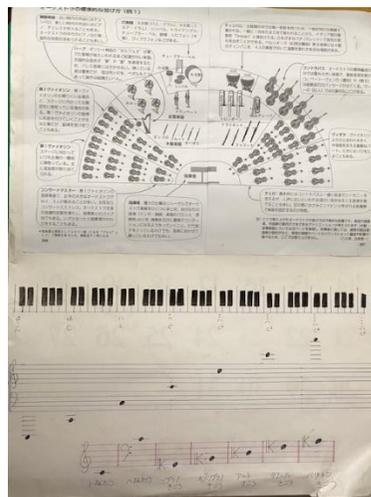
図カレ11



図カレ8



図カレ12



図カレ9

壁の活用

教室の壁には、生徒に覚えてほしいことや知ってほしいことをカレンダーの裏や模造紙に書いたものを貼っています。1か月同じ物を貼ります。何気なく見て記憶に残すお手伝いです。カレンダーの裏を使ったものは常にかけてあります。基本的に「今月はこのページ」と決めていますが、生徒は自由にめくって見えています。(図カレ12)のようにドアに掛けています。色々な切り抜きを拡大コピーして貼っています。

(図カレ1) 音符休符と5線・強弱

(図カレ2) 強弱記号と速度記号

(図カレ3) 鍵盤楽器

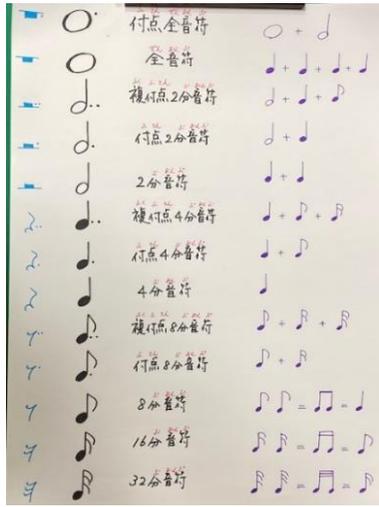
(図カレ4) 木管楽器と金管楽器

(図カレ5) 正装用のカツラ

(図カレ6) 時代別ドレス

(図カレ7) バロック・古典派・ロマン派・近現代・邦人の作曲家

(図カレ8) 作品番号

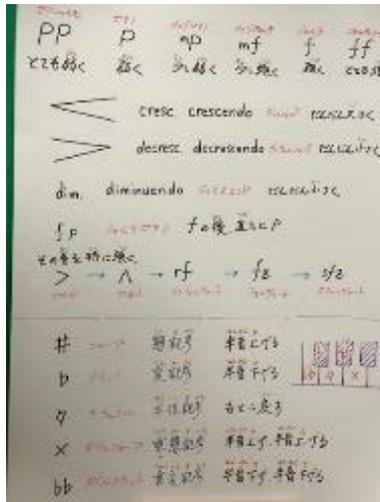


図壁 1

- (図カレ9) オーケストラとハ音記号
- (図カレ10) ショパンのパリ暮らし
- (図カレ11) 日本での称される呼び方
- (図カレ12) パリの4期めぐり

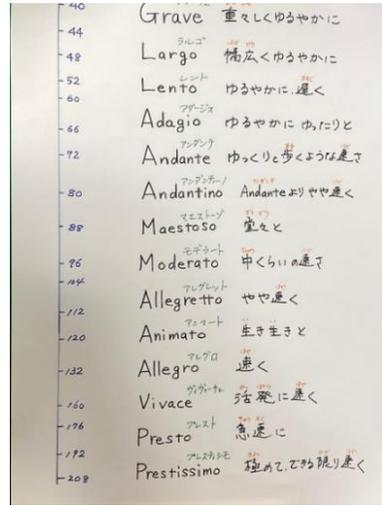


図壁 2

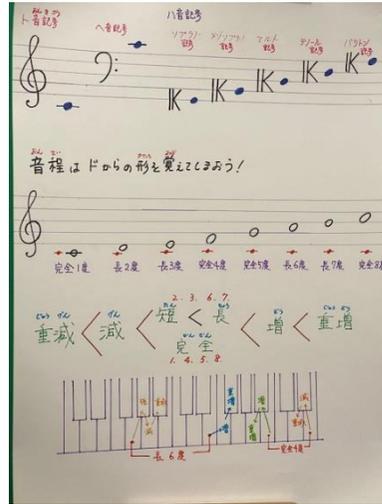


図壁 3

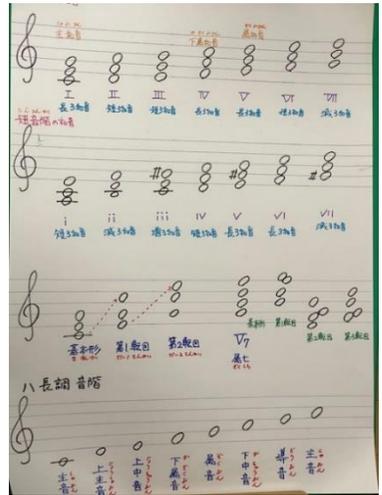
図壁 4



図壁 5



図壁 6



- (図壁 1) 音符と休符の名前と長さ
- (図壁 2) 拍子に関する事
- (図壁 3) 強弱と臨時記号
- (図壁 4) 速度に関する事
- (図壁 5) ハ音記号と音程
- (図壁 6) 和音に関する事

こちらはどれか1枚を壁に1か月間貼った状態にしています。

図イ1

生徒たちはワークをするとき、本棚にある自分が使い易い本で調べますが、カレンダーや壁に貼られているもので答えを見つけることも多いです。「写すのでなく覚えようね」と一言付け加えるようにしています。生徒が見る資料として

(図イ1) 作曲家の写真を貼ったカードです。自分が演奏している曲の作曲家を見つける
と喜んでいます。



(図イ2) ファイル名は歴史比べとされています。日本で、

図イ3

図イ2

世界でどのようなことが起こって、誰が活躍したのか、その時代の作曲家は誰がいるのか等を比較できるように書いています。

(図イ3) インターネットで調べた際、生徒たちと共有
したい資料は分別し必要などころを選び、小学生以

A large table with multiple columns and rows, containing detailed information about composers and their works.

下にも読んでほしいときはルビを付けてファイルにします。

音楽会について

私の教室だけで音楽会を開くようになって2020年で30回になります。

私は音楽はみんなで楽しむものだと思っています。音楽会では、個人曲・家族や友人との連弾・お歌・声楽は定番で、これらに加えて、毎回グループで色々な事をします。小学生未満はリズムを叩いて歌います。それぞれの生徒が持てる大きさの楽器を持って、または手作りの鈴などを腕にはめてリズムを打ちます。

小学生以上はその音楽会のテーマに沿った発表をします。個人曲・連弾曲に加えて、グループの部を作ります。

3つ〜4つのグループに分け、作曲家・舞曲・時代・季節・国歌・ツエルニー30番・カノン〜バロック〜インヴェンション・デイズニー・メドレー曲等、その年のテーマを、5〜8人位で演奏・物語を読んでピアノを弾く・弦楽器
管楽器の演奏家に来ていただいてアンサンブル演奏・CDやFDとの連弾・連弾曲の1つのパートをあらかじめF
Dに録音し当日はもう片方を演奏して連弾・ヴォイスアンサンブル・トーンチャイムなど色々な楽器での合奏・ド
レミパイプ・木製金属製等30センチほどの長さでボードを叩く(図楽器G)・フレデリックドラム等個人では

図楽器G



終わるといふ長丁場です。出演者が疲れないうように、小学生未満は午前中、小学生は午後5時くらいまで、それ以外
味わえない音楽を作ります。私のところは生徒の人数が多い為、音楽会は午前10時から始まって午後9時ごろに

降の時間に中学生以上としています。当然のことですが、ご自分のお子さんの演奏を聴かれるのが目的で他の方の演奏はあまり興味を示されない方もおられます。しかし、グループだと必然的に他のお子さんの演奏も聴かれます。すると興味も持ってくださいます。全然知らない方からの「お上手ですね」という声掛けは本人の良い励みになります。第19回・第23回・第28回プログラムをQRコードで見れます。

教室のイベント

年に1〜2回、ワークをしなくて良い日を設けています。楽器・ペーパーフラワー・白紙のジグソーパズルに絵を描く・うちわ・風鈴・音楽会のプレゼントを入れる紙袋に絵を描く等作った物は写真を撮って1ヶ月教室に飾ります。その後写真は生徒に、写真データはホームページの生徒専用ページに載せます。

(図言葉のない絵本)言葉のない絵本(色々なシールを集めて関連性のあるもので1ページをいくつも作ってあるもの)を見てお話を作ります。とても素晴らしいものがいくつもできます。



集中力

(図玩具) おもちゃを作ります。一応「ドレミファソラシド」を意識しています。右上は、厚紙でわっかを作りしつかりした紙箱に張り付けたもの。これはドレミファソラシのわっかに順にボールを通して遊びます。下の板状のものは、箱の中に穴の開いた板を乗せ小さな板で道を作り、ボールを転がしてゴールを目指すゲームです。1か所狭くて通りづらいところがあるのですが、子供たちは箱を持ち上げ天井に向けて上を向いて、ボールが穴に落ちないようにしたり、家から磁石を持って来てボールを動かしたりと知恵を働かせます。左は箱に粘土で色々な盛り上がりどレミの色の盆地を作り、そこに毛糸玉を入れるゲームです。ピアノの演奏には集中力が必要です。集中力は何で養われても良いと思います。「凄い集中力ね」と声掛けし、本人に集中力があることを自覚させます。

パソコンを使って

(図パ1) はレッスン時間表です。毎週作っておくと生徒の欠席の箇所を振り替え希望を入れやすいです。



(図玩具)

(図パ2) は出席簿です。休むと水色に枠に色を付け、振替の声掛けが出来るようにしています。

(図パ3) 月謝表です。金額と納められた月日を記入します。

(図パ4) は生徒の使用本です。年に2回作ります。今どの本を使っているかを記入しておく、次にどういう本を選んでいけばよいかじっくり考えることができます。項目はエチュード、これは運指、テクニック等生徒によつて目的が色々増えるので多くとつてあります。教則本、バロック、曲、ワーク、オリジナルテキストの何を渡しているかの項目があります。他の生徒に渡している本と比較もできるので決める目安にもなります。

(図パ5) (図パ6) (図パ7) は本来横1列に並んでいます。これは蔵書のファイルです。エクセルで管理しています。出版社、タイトル、サブタイトルは本棚で本を見つけやすいようにしています。季節、動物、作曲家の国等項目を作っているのは、音楽会の曲を決めるときの参考にします。連弾集でない本の中に入っている連弾曲も、分かりやすいように印をつけます。アンサンブルも同様です。現在15000曲を越したため、データでフィルターをかけてもすぐに検索できないので2つに分けて使っています。

	月日	月日	月日	月日
	月	火	水	木
10:30	生徒名	生徒名	生徒名	生徒名
10:45	生徒名	生徒名	生徒名	生徒名

図
パ
1

			1	2
学年	曜日	生徒名		月日
学年	土	生徒名		
	水	生徒名		
	土	生徒名		

図
パ
2

3	月		月	
生徒名	金額	入金日	金額	入金日
生徒名	金額	入金日	金額	入金日

図
パ
3

					弦楽器・ 管楽器
作曲家国	作曲者	連弾	編曲者	合奏	

図
パ
4

		エチュード					教則 本
		ハノン系		ツェルニー			
女	生徒 名	ピアノ ランド 1					ミッキ ーと一 緒1

図
パ
5

						映画 テレビ CM
自然	国	選択	品番	曲名		
				おちばのささやき		
○				雪合戦		

図
パ
6

出版社	タイトル	サブ	季節	動物	植物
音友	大村典子PP	A歳時記	秋		○
音友	大村典子PP	A歳時記	冬		

図
パ
7

楽譜を見たいと思った時、購入してから持っていることに気づいて、もったいないことをしてしまったと思うことが何度かありましたので、作りました。

ここには出していませんが音楽会の曲もファイルにしています。いつ、誰が、何年生の時に、何という作曲家の何の曲を演奏したかを書いておくと、生徒の曲選びに役立ちます。

緊急事態宣言

2020年に、新型コロナウイルス感染拡大を阻止するための緊急事態宣言が出されました。それに伴い、私の教室を含む多くのピアノ教室が休業しました。

レッスンを再開できたのは、最後のレッスンから2〜3か月も経過した後でした。

教室がお休みの間、小学校高学年以上の生徒には「この時間を活かして、好きな曲を選んで練習してください」と伝え、小学校低学年以下の生徒には「今まで習った曲の中で『いいな』と感じている曲を、もっと沢山練習して素敵なお曲に仕上げてください。始めのレッスンで仕上げた曲を何曲でも聴かせてね。」と伝えました。生徒によって

休みの間のピアノ練習の向き合い方は異なります。練習を怠らない生徒もそうでない生徒もいます。そこで、休明けの生徒の状態を私が理解するため、再開後最初のレッスン用に、現状をチェックできるテキストを作りました。このテキストは、毎週の確認や初見練習の代わりに使います。

幼稚園生以下の生徒には、ト音記号で書かれた歌ったことのあるメロディーの読譜をさせます。知っている曲を選びますので読みやすいですし、生徒が読めて自信を持てるのが大切です。手を叩かせながら読ませて、読めたら「凄い！音を忘れてなかったね」と声かけすることで、レッスン再開の意欲を湧かせます。

幼稚園年長以上はト音記号チェックを使います。ドの位置確認・指番号・キーを移動するとき、キーに指をきちんと置いているか見ます。単音から指移動を徐々に増やし、重音・和音へと進みます。本人が出来そうなどころまでいいと思います。音自体は簡単に読める音、指番号も弾きやすいものを書いていますので、生徒に負担はないと思いますし、先生側からも指の形・下ろし方・手の動きをしつかりとらえることができます。

ト音記号は右手用なので、左手用のヘ音記号も用意しました。楽譜は1オクターブ下げているだけで同じです。スムーズに進めることができる生徒には、両方使うと良いと思います。少ない時間で現状をチェックできます。これは、今回のような場合だけでなく、受験などのためにレッスンを数か月休んだ生徒の現状把握にも使えると思います。

教室の看板

ボード板に紙粘土で形を作って絵の具を塗り、ボンドで張り付けて作りました。仕上げにニスを塗り、薄いビニールカバーをかけてあります。3〜4年に1度作り替えます。看板の横に教室チラシを「ご自由にお取りください」ボックスに入れて置いています。壁には紺色のペンキを塗り透明の板に絵を書きました。

あとがき

教室をずっと続けてこられたことに感謝しています。教室の生徒数が維持できているのは、生徒の入れ替わりが少



ないことが一番の理由だと思います。辞められる方の大半は引越しです。10年以上教室に通っている生徒は多くいますし、初め、子供さんが習いに来られて「楽しそうだから」という理由で、お母さんが習いに来られる。子供は大学進学などで大阪からいなくなり、教室を辞めても、お母さんはそのまま続けて来られている。

かつて生徒だった人が戻ってくる。受験で1年程ストップしていても、「合格したからピアノ出来る」と嬉しそうに顔を見せてくれる子供。期間をあけて戻ってくる生徒は、最初は親に言われて習い始めたのが、今度は自分の意志で始め音楽を楽しんでくれています。教える側からすると、とても嬉しいことです。生徒の子供さんも沢山通ってきています。私が目標としている「町のピアノ教室」でありたい。かかりつけの、何かどこか痛くなればあそこの先生、というのと同じように、「ピアノが弾きたくなったら松井音楽教室」と思ってもらえる教室づくりを目指してきました。「留学するので、話が通じなくてもピアノが弾けたら」と言って8か月ほど頑張ってピアノ曲を2曲仕上げた中学生、「学校でコーラスの伴奏したいから伴奏だけ弾けるようにしてほしい」と言って通い始めた生徒は今も教室に通い続けています。折々に顔を見せてくれるかつての生徒たち。私は本当に幸せ者だと感じます。

皆さんの教室にも同じ幸せが訪れますように。この本に最後まで目を通してくださり、ありがとうございました。

コロナ禍において教室ではエアードック（空気清浄機）を置き、除菌委注意を払っています。

生徒達は教室に来たら消毒と検温記入、人が触れるものには抗菌コート、ピアノは生徒毎にキークリンで消毒、教室で行うピアノレッスン以外の事も、紙媒体を使うことを増やしました。



本を読まれて、テキストを使われて質問がありましたら

yitokopiano@gmail.com

にメールをください。